
魔法少女
アルフェリカ
第２話　絶望に沈む２人の魔法少女
「やめろ…舞華から、離れろぉ…！　ぅあぁぁあぁぁあぁっ！！」
敗北した魔法少女たちを、
スライム、触手、雑魚戦闘員が嬲り尽くす！



目次

登場人物紹介　P2～P4
本編　P5～P138
あとがき・奥付　P139

登場人物紹介（１）

●魔法少女アルフェリカ

／アルフェリカ・フォン・ザ・バーキライド

『星』の異名を持つ、最も古参の魔法少女。

異世界の王都、セントベルの近衛騎士でもある。

エビルズアークを追って、単身こちらの世界にやってきた。

「形状変化」により、ステッキを様々な武器の形に変えて戦う。

重力操作や、物体の重さを変える魔法が得意。

ルカンダにより、「性感が１００倍になる紋様」と、「絶頂すると魔力を遠隔で奪われてしまう紋様」を、身体に刻まれてしまった。





登場人物紹介（２）

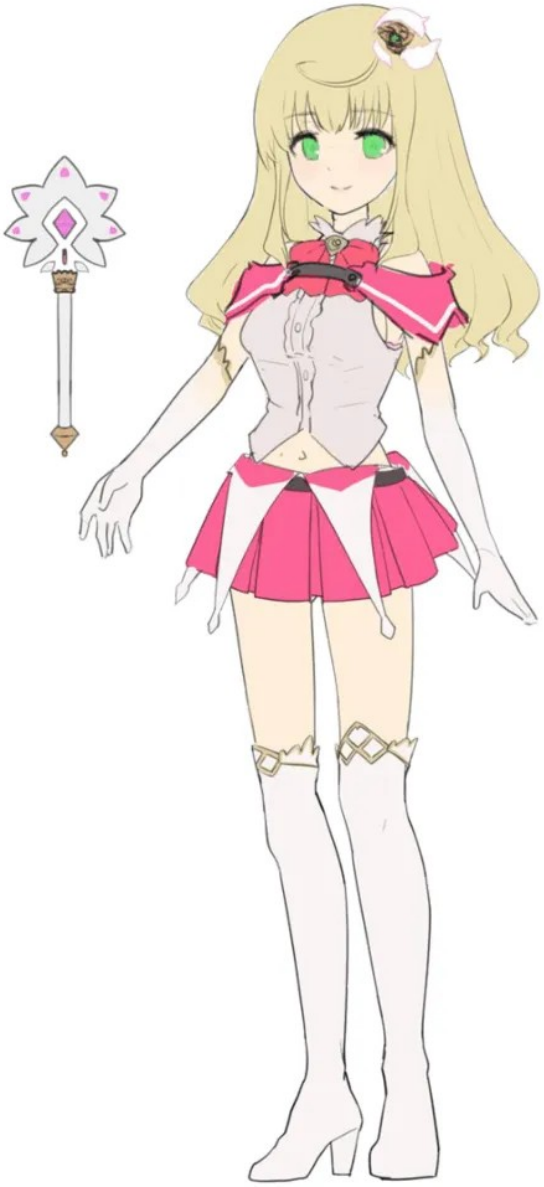
●魔法少女ノーブル・ローズ／早乙女舞華

良家のお嬢様。

友人を助けたいという強い想いが、異世界から飛来した魔法のステッキと彼女を引き合わせた。

単身エビルズアークと戦い、一度は敵の基地深くまで攻め込み、敵の幹部である四魔将との戦いに勝利するも、アーク・デュランを討つには至らなかった。

敵に敗北し、一般人に輪姦されていたアルフェリカを救い出す。



登場人物紹介（３）

●アーク・デュラン

「エビルズアーク」の首領。触手の集合体。

アルフェリカ達に追いつめられ、こちらの世界に逃げのびてきた。一時は仮死状態になっていたが、収集した魔力で復活を果たす。

＜アーク・デュラン配下「四魔将」＞

●ルカンダ

女性型で悪魔のような外見をしている。

相手に様々な効果を付与する〝紋様〟を刻むことができる。

●Dr.バルド

白衣を着た科学者風の男。人々から集めた魔力を用いて、人工生物である「バイオ兵」や「怪人」を生み出す。

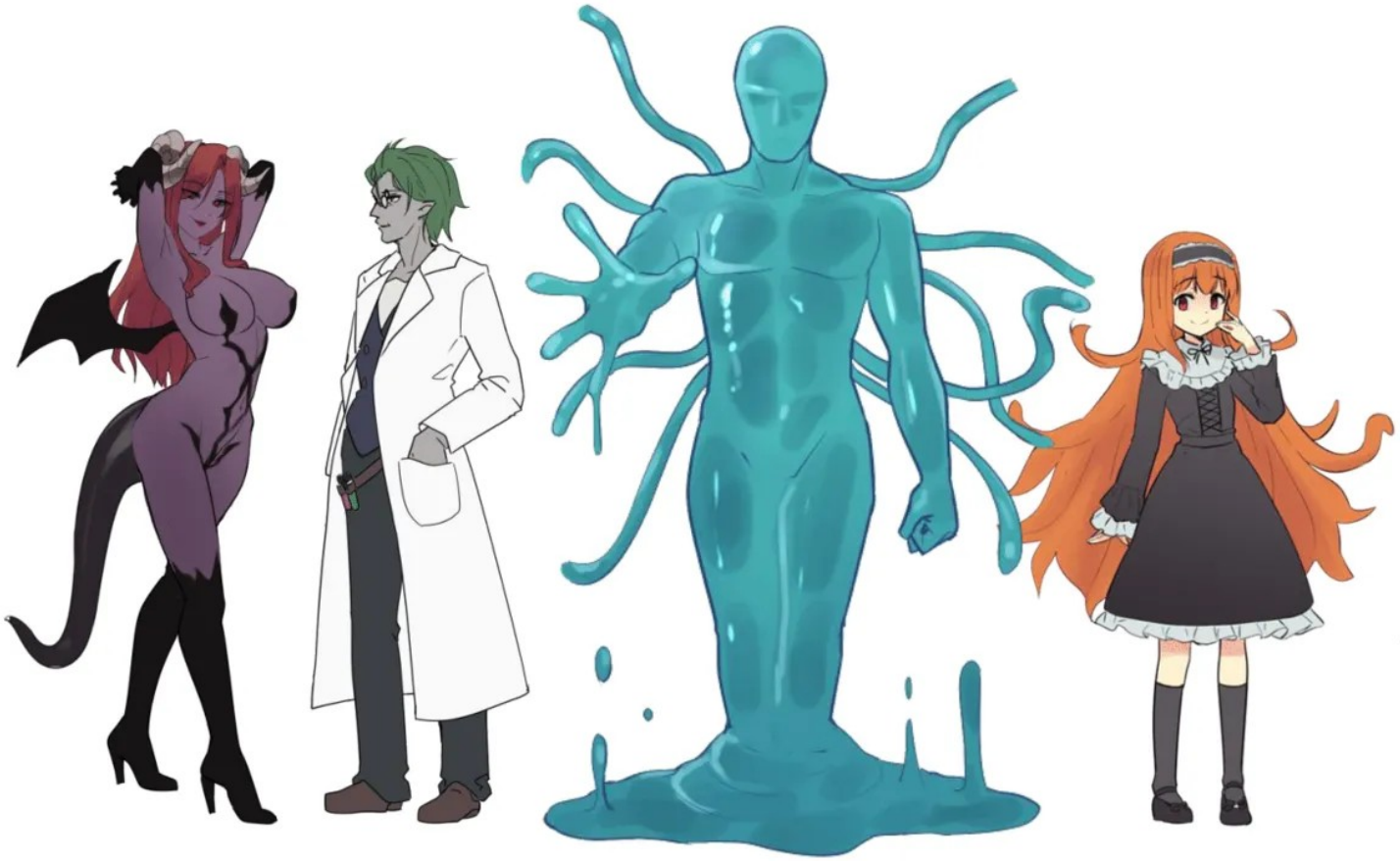
●グリーヴァ

体がスライムで構成された魔法生物。

●レスター

アーク・デュランの娘で触手の集合体。

可愛らしい外見は人間に擬態したもの。



魔法少女アルフェリカ　第２話　絶望に沈む２人の魔法少女

８

視界を埋め尽くす男達が、入れ替わり立ち代わり、私を犯し続ける。

硬いペニスで膣内を責め立てられ、私は絶頂する。

それはとても屈辱的で、嫌悪すべきことだったが、同時に私は快感を覚え、歓喜に震えていた。

（気持ちいい……）

絶頂を繰り返すたびに、魔法少女としての使命は少しずつ忘れ去られていく。

私が、魔法少女から性奴隷へと塗り替えられていく。

（あぁ……気持ちいい、気持ちいい……）

いつしか私は、ずっとこの快楽の中に浸っていたいと、考えるようになっていた。

（またイくっ……イく……イくっ……）

「イくぅぅっ!!」

9

「……!!」

私は目を覚ました。

「ここ、は……？」

見覚えのない寝室。部屋の内装は豪華で、かつて招待されたセントベル王宮の客室を彷彿とさせる。部屋の中央にある大きなベッドの上で、私は横になっていた。

（私は、ルカンダに捕まって……怪人やこの世界の男たちに犯されて……それから……）

薄いカーテン越しに差し込む朝日を身に受けながら、私は半身を起こす。

体中を汚していた白濁液はきれいに消え去っていた。変身が解け、ほとんど全裸になっていたはずの私の体は、純白の寝間着を身に着けている。

（あれは、夢だった……？）

忌まわしい輪姦の記憶。それらがすべて夢なら、どれほど喜ばしいだろうか。しかし、下腹部に残った鈍痛が、昨夜の記憶が事実だったと私に告げていた。

「くっ、うぅ……はぁ、はぁ……」

（身体が、熱い……）

男達に凌辱される淫らな夢を見たせいか、身体中がじっとりと汗ばんでいた。呼吸も荒くなっ

ている。私は大きな呼吸を繰り返して心を落ち着けようとしたが、高鳴っている鼓動はすぐには治まりそうにない。

（濡れている……）

私は、自分の股間部分が、ぐっしょりと濡れていることに気が付いた。

太ももの内側がヌルヌルした愛液まみれになっている。誰かが穿かせてくれたであろう白い下着が、ぴっちりと秘所に張り付いていた。

（私の身体……こんな、淫らに……くぅぅっ……）

手に付着した愛液が、指と指の間で糸を引く。

昨日まで男を知らなかった私の身体は、怪人や男達に執拗に犯され続けたことにより、今では無意識に快感を求めていた。深呼吸により呼吸は整っても、下腹部の疼きは逆に大きくなっているように感じられる。

「くっ……ぁぅっ……だめよ……耐え、ないとっ……うぅぅ……」

膣の中に指を突き入れて、かき回したい。強い衝動に駆られ、無意識に手が股間に吸い寄せられていく。

しかし、私は歯を食いしばってその衝動に耐えた。手を強く握り締め、自慰行為を阻止する。

（負けるものかっ……たとえ身体を淫らに変えられようと、心まで屈するわけにはいかないっ……！）

目を閉じて、邪念を追い払おうとした……その時だった。

コン、コン、コン。

部屋の扉が外から叩かれた。

「！」

「失礼します」

扉を押して入ってきたのは、上品な佇まいの少女だった。

「ぁっ……目を覚まされたのですね？」

体を起こしている私を見て、その少女は顔をぱあっと明るくさせた。

小さくて丸い顔、大きな瞳。ボリュームの多い栗色の髪が特徴的だ。白いブラウスと腰から下を覆う大きな黒いスカート、そして脚には黒タイツを着用している。

その少女はベッドの傍らまで駆け寄ってくると、床に膝をついて私と視線を合わせた。

「私は早乙女舞華と申します」

「早乙女、舞華……」

おぼろげだった記憶が蘇ってくる。欲望にまみれた男たちに犯され続けていた私を救出した魔法少女。その雰囲気が、目の前の少女と酷似していた。

「あなたが、私を助けてくれたの？」

「はい……ごめんなさい。私がもっと早く駆けつけていれば……」

早乙女舞華は明るかった表情を曇らせた。凌辱を受けた私のことを気遣ってくれているのだろう。

「あなたが気に病むことはありません。あれは……私が負けたために起こったことだから。それよりも……」

私は、目の前の少女の目を覗き込みながら尋ねる。

「あなたも、魔法少女なの？」

「……はい」

「ステッキは……？　魔法少女のステッキを見せてほしい」

「これです」

私は早乙女舞華が差し出したステッキを手に取る。

（間違いない。これは〝花〟の魔法少女のステッキだ）

私がこの世界に転移するための道を切り開くため、４人の仲間たちは自らのステッキをゲートに差し込んだ。私を追い抜いて光の中に消えたステッキもまた、この世界にたどり着いていたのだ。

「あなたにも、魔法少女の適性があるのね」

「適正、ですか……よく分かりません。あの時は無我夢中でしたから」

「どこでこれを？」

「突然目の前に出てきたのです。強い光の中から」

「……」

（強い光と共に目の前に現れた、か……まるでステッキが持ち主を選んだようだ）

本来の持ち主を失い、ステッキは新たな持ち主を探していたのかもしれない。そうなると、他のステッキも同じように誰かの手に渡っている可能性がある。

仲間のステッキの回収も私がやるべきことだが、まずはエビルズアークと戦うことが優先だ。ステッキを扱える人間がいるのなら、貴重な戦力となる。

それに、早乙女舞華、彼女になら、仲間のステッキを預けても大丈夫……そんな気持ちになった。

「改めてお礼を言います、早乙女舞華」

私は彼女にステッキを返す。

「昨夜、捕らわれた私を救い出してくれたこと、とても感謝しています」

「それは、当然のことです。あなたも、魔法少女なのですよね？」

そこで私は、まだ彼女に名乗っていなかったことに思い至った。私は彼女に向き直り、胸に右の掌を当て、敬礼のポーズをとる。

「私の名前はアルフェリカ・フォン・ザ・バーキライド。セントベル近衛騎士団の１人、〝星〟の魔法少女です」

１０

それから私と舞華は、互いの持つ情報を交換した。

私からは、私が異世界から来た事、異世界でエビルズアークと戦っていたこと、魔法少女のことを話した。

舞華からは、この世界でのエビルズアークの活動や、舞華とエビルズアークとの戦いについて聞くことができた。

「やはり、エビルズアークがこの世界に来てから、だいぶ時間が経っているのね……」

「はい。彼らが姿を現してから、約３か月が経過しています」

３か月というのは、日数で言うと９０日程度とのことだった。転移する際のわずかな時間の差で、日数にここまで隔たりができてしまうとは。

「ところで、話に出てきた、もう１人の魔法少女ですが、今はどこに？」

「別の部屋にいます。けれど、小日向さんはこの屋敷に来てから、ずっと部屋に閉じこもったままで、私もほとんど会えていません。敵に捕らえられ、悪に身を堕としてしまったことを、悔や

み続けているのです」

「そうなのですか……」

その魔法少女、小日向沙織は、守ってきた人々に凌辱され、心が壊れてしまったらしい。人間を憎むようになり、魔法少女の衣装も変化してしまったという。

舞華は小日向沙織と対決し、エビルズアークから助け出した。それが、今から３０日ほど前のことだ。

「私がアーク・デュランをこの世界に逃がさなければ、小日向沙織も、その他大勢の人々も、苦しむことはなかった……本当に、ごめんなさい……」

「謝らないでください！」

そう言って、舞華は私の手を握り締める。

「悪いのはエビルズアークです！　あなたの世界でも、私の世界でも、悪事を働く彼らを、許してはいけません」

「ええ、そうよね……」

「私も戦います。２人で、エビルズアークを倒しましょう！」

「……ありがとう」

彼女からそう言ってもらえて、とても嬉しかった。

この世界に来てから、人々に追い回され、犯され、単身で転移したことを後悔もした。

しかし今は、目の前に味方がいる。そう思うと、心の中が温かくなっていくのを感じる。舞華となら、エビルズアークと戦っていけるのだと、そう思える。

「ところで、私のステッキはどこに？」

「ぁっ、はい。ここにあります」

舞華は室内にある机の引き出しから、ステッキを取り出し、私に差し出した。

「……！」

それを受け取り、握り締めた時、私はとても重要なことを思い出した。

「ごめんなさい、舞華。私は、もう戦うことはできない……」

「……えっ？　どうしてですか？」

「大気中に魔力のないこの世界では、魔力を補充する手段が、ないの……」

私は昨日、怪人や男達に犯され、何度も何度も絶頂してしまい、体内に蓄積していた魔力をすべて放出してしまった。今、私の体内には、ひとかけらも魔力は残っていない。これでは魔法を使うどころか、魔法少女に変身することもできない。

この世界の女性は、体内で魔力を生成することができるので、仮に体内の魔力をすべて失っても、時間が経てば魔力を回復させることができるだろう。しかし、異世界から来た私には、そのようなことはできない。

「魔力が、回復しないということですか？」

「そう。私のいた世界には、大気の中に魔力があった。大気から無限に魔力を吸収できるから、この世界の人みたいに体内で魔力を生成する機能がないのです」

「なるほど……確かにエビルズアークも、魔力の回復ができないから、女の人を襲って魔力を集めていると言っていました」

舞華はそう呟きながら、何か考えているようだったが、やがて何を思いついたように顔を上げた。

「アルフェリカさんも、他の人から魔力を貰うことはできないのですか？」

「え……？　それは、考えていなかったけど……可能なのでしょうか」

エビルズアークは、女性を絶頂させて、その際に放出される魔力を収集していた。同じように、魔力を持つ相手を絶頂させれば、魔力を収集することができるかもしれない。

（いや、何も絶頂させる必要はないのか？）

強制的に魔力を放出させる方法が絶頂というだけで、例えば相手が意図的に魔力を放出するならば、わざわざ絶頂させる必要はない。

「できる、かもしれません」

「……！　方法があるのですか？」

「魔力を持つ相手に協力を求め、放出される魔力を吸収する。でも吸収するには、粘膜的な接触が必要になるでしょう」

「粘膜的な接触？」

「例えば、口づけ、とか」

口内を介して魔力を授受する。これが一番まともな方法に思える。

「でも、魔力を提供してくれる相手がいるかどうか……」

「……あ、あのっ……」

舞華が、顔を伏せながら囁くように言葉を紡いだ。

「私では、だめでしょうか？」

「舞華……あなたが、私に魔力を？」

「はい……魔法少女の私なら、魔力の量は結構あると思いますし、魔力を渡してもそのうち回復

しますし……だから……」

「……分かりました」

彼女の提案こそが、最善の方策だろう。

彼女にとって、たとえ同性相手だろうと、口づけを交わすことは、少なからず抵抗のあることのはずだ。それは、うつむいて恥じらう様子を見れば分かる。

だが彼女は、自ら申し出てくれた。その勇気に、応えなければならない。

「舞華、あなたの、魔力を貰えますか？」

「はい……」

舞華が小さく頷く。そしてゆっくりと、私が座るベッドの上に、体を移動させてくる。両手をシーツの上に乗せて体重を支えながら、顔を私の方に近づけると、舞華は黙って目を閉じた。

「……」

私は彼女の手の甲に手を重ねた。私に触れられると、ぴくんと彼女が小さく震える。彼女の緊

張感が伝わってきて、なんだか変な気分になってしまう。

下腹部の疼きが大きくなっているのを感じる。これは性的な行為ではない、魔力を受け渡すための手段なのだ、と、自分に言い聞かせるが、心臓が高鳴っている。

「では、行きます……」

「ん――っ……」

私は彼女と唇を重ねた。

甘い香りがした。彼女の唇は柔らかく、思わず甘噛みしたくなってしまう。

「んっ……んむぅっ……」

「はむっ……りゅうっ……」

唇の表面で接触しているだけでは、魔力の受け渡しはできない。何度か口を左右に振り、わずかにできた唇の隙間から、舌を滑り込ませた。

「ん――きゅむぃぃっ……！」

「ちゅく……んれぅ……んっ……」

（これは……！）

濃密な魔力が流れ込んできた。彼女が意図的に放出している魔力が、私の体内へと取り込まれていく。

（大量の魔力が、私を満たしていく……！）

枯渇していた魔力を手に入れ、私の体は喜びを感じていた。より多くの魔力を得ようと、私は無意識に、唇と唇を強く押し当てる。

「んぐっ、んむぅぅぅっ……！　んっ、ちゅぐ、くひゅぅぅぅっ……」

「はっ、んむちゅっ……れじゅっ、んっ、んんっ……！」

私は彼女を求め、彼女はそれに応じた。２人の舌が激しく絡み合う。口の隙間から漏れた唾液が、ぽたぽたとシーツに染みを作っていく。



「んっ、くっ、んぐっ……れぅ……むきゅうぅ……」

「っ……ぁっ、むっ、じゅむっ……ちゅぐぅ……！」

私は彼女を抱き寄せた。彼女の大きな胸がブラウス越しに私に当たっている。女性的な魅力に溢れた彼女の身体に触れると、同性であるにもかかわらず、興奮を募らせてしまう。

もっと、彼女の身体を堪能したい。下腹部の疼きと相まって、私はそんな邪な感情を抱いてしまっていた。

「んっ、くふっ、んんっ……ちゅむっ、んんんっ……！」

「れぅっ、りゅぐっ、んっ！　れじゅっ、むっ、んむぅぅっ!!」

身体の疼きが高まっていく。

叶うなら、彼女の身体を堪能すると同時に、彼女に私の身体を触って欲しい。そしてこの疼きを鎮めてほしい。そんな気持ちがどんどん強くなり、やがて抑えきれなく――

「っぷはあぁぁっ!!」

舞華が、大きく息を吸いながら、私の傍を離れる。

「ぁ……」

私は今、どんな顔をしているのだろうか。物欲しそうな視線を送ってしまったかもしれない。

欲望のまま舞華の身体を貪ろうとした自分が恥ずかしい。

（私は、それほどまで淫らに変えられてしまったのか……）

顔を真っ赤にした舞華は呼吸を整えながら、控えめに言葉を発した。

「その……今のでだいたい、私の魔力の半分をお渡しできました。アルフェリカさんは、どれくらい魔力が回復しましたか？」

「え、えぇ……私は、最大の４分の１くらい、ですね」

舞華よりも私の方が、魔力の貯蔵量が多いということになる。

「その……続きは、私の魔力が回復してからということで……」

「ええ。一度にすべての魔力を渡す必要はないでしょう。それに、これだけ魔力が戻れば、また

魔法少女として戦うことができます。ありがとう、舞華」

私の感謝の言葉に、舞華は照れくさそうに笑った。

「役に立てて、よかったです。へへ……初めてのキス、捧げた甲斐がありました」

「初めて!?　それは……悪いことをしました……」

初めての口づけが特別な意味を持つのは、この世界でも同じらしい。その相手が私でよかったのかと尋ねたくなったが、起きてしまったことはもう変えられようがないので口には出さなかった。

（そういえば、昨日の男どもは私を犯したが、唇は奪わなかったな……）

代わりに、私は舞華にこう告げた。

「私も初めてでした」

１１

「はあぁぁぁっ!!」

形状変化で生成した剣が、粘液怪人を脳天から真っ二つにした。

どちゃり、と怪人の残骸が地面に崩れ落ちる。私は飛び散る粘液を後ろに跳躍して避けた。怪人の残骸は小さな光の粒子へと変わり、大気に溶けて消えていく。

（まずは１体！）

私は魔法少女のスカートをはためかせながら周囲を観察する。魔法少女に変身した舞華が、光の魔法で大勢のバイオ兵をまとめて吹き飛ばしていた。黒い兵隊の相手は舞華に任せておいて問題ないだろう。

（ならば私は、大きい奴を相手にする！）

私は近くまで迫っていた８本腕の怪人と対峙した。私の純潔を散らした憎い相手だ。必ずこの

手で始末してやる。

（形状変化、『槌』！）

私はステッキに魔力を込めると、薄紫色の刃を円筒状の槌に変化させた。

「てりゃあぁぁぁぁっ!!」

真正面から繰り出される怪人の拳に対し、こちらも正面から槌を叩きつける。

ドゴオオオン！　拳と槌がぶつかり地面を揺らす。

（押し切るっ!!）

８本腕の怪人の力よりも、魔力で強化した私の腕力の方が強い。さらに私は、物質を引き離す魔法を、８本腕の怪人に向けて発動させた。

槌と魔法の２つの力を受けて、８本腕の怪人が吹き飛んでいく。

（仕留めるっ！）

私は跳躍すると、倒れた８本腕の怪人の上に、振りかぶった槌を叩きつけた。

一段と大きな衝撃が大地を揺らした。灰色の硬い地面、舞華がアスファルト道路と呼んでいたものに、大きな亀裂が入る。

ぺしゃんこに潰れた８本腕の怪人はもう動かない。静かに光の粒子へと姿を変える。

（厄介な奴は倒せた……！）

体中に魔力が漲っている。自由に魔力を使えれば、この程度の相手に苦戦することはない。

（これもすべて、舞華のおかげだ）

あれから舞華とは、幾度となく唇を重ねた。そのたびに少しずつ魔力を譲り受け、今では体内に蓄積できる限界の量まで魔力を保有している。

私たちが２人で出撃するのは、これで３度目。敵の兵隊、バイオ兵の出現は、邪悪な魔力の流れにより察知できるため、その動きを掴むことは容易だ。過去２回の出撃において、現れたバイオ兵のすべてを駆逐することができている。

戦闘になれば魔力を消費するが、舞華の屋敷に戻るたびに彼女から魔力を補給してもらえるた

め、私は魔力の消費を気にすることなく戦えていた。

（残るは、あの透明になる怪人か……）

今回の敵の中には、以前も戦い、私を辱めた特別製の怪人３体も混じっていたが、すでに粘液怪人と８本腕怪人の２体は撃破している。残るは、先ほどから姿を消している透明怪人だけだ。

（面倒だ。一気にカタをつける！）

「ノーブル・ローズ！　どこかに掴まって！」

私はバイオ兵と戦う舞華に合図を出すと、槌状のステッキを頭上に掲げた。

（魔法で、物質を引き寄せる！）

周囲１０メルトほどの範囲に魔力を奔らせ、頭上に掲げたステッキを中心として、物体を引き寄せる魔法を発動させる。

うじゃうじゃと周囲を取り囲んでいたバイオ兵の群れが、ステッキに引き寄せられ、宙に浮いた。私の頭上に、黒いバイオ兵が塊を作っていく。その中に透明状態を維持できずに姿を見せた

透明怪人の姿も見えた。

「ノーブル・ローズ！　今です！」

「はいっ！」

地面の亀裂を掴んで私の魔法に耐えていた舞華が、ステッキを振りかぶった。

「シャインスラッシュ!!」

舞華のステッキが眩い光を放つ。私の頭上で密集していたバイオ兵を、大きな光の柱が飲み込み、上空へと跳ね飛ばした。

バラバラと、飛び散ったバイオ兵が落下してくるが、その黒い胴体は地面に激突するより前に、光の粒子となって消えていく。透明怪人も消滅していくのを、視界に捉えて確認した。

（終わった、か……？）

バイオ兵の嫌な気配は消えている。だが、油断はならない。気配を察知できない四魔将が潜んでいる可能性があった。私は警戒しながら周囲を注意深く観察する。

しかし、四魔将が姿を見せる様子はなかった。

（今回も四魔将は現れなかったか。だが、特別な３体の怪人は倒した。次あたり、現れるかもしれないな）

異世界での戦いをいつまでも続ける気はない。奴らの戦力を削ぐためにも、四魔将を仕留めていく必要があった。

「アルフェリカさん、人が集まってきました。引き揚げましょう」

「……分かりました」

戦闘が終わった雰囲気を察したのか、私たちの姿を見ようと人々が集まってくる気配がある。

私と舞華は大きく跳躍し、建物の屋上まで跳び上がった。

「うっ……！」

突然、下腹部が切なく疼く。

あの日ルカンダに刻まれた、感度を上げる紋様は、私の首筋に残ったままだった。紋様を消す

ことはできず、身体の疼きは魔法でなんとか抑え込んでいたが、ふとした瞬間に強く快感を欲してしまうことがある。

（厄介な身体にされてしまったものだ。ルカンダを倒せば、紋様は消えるのだろうか？）

「アルフェリカさん？　大丈夫ですか？」

「ええ、問題ありません。大丈夫です」

私たちは屋上から屋上へと飛び移りながら、屋敷への帰路についた。

１２

「バルド！　何か策を考えて頂戴！」

私の実験室に入ってくるなり、ルカンダはそう叫んだ。

「やれやれ。単刀直入だね。また魔法少女にバイオ兵を倒されたのかい？　僕が貸した３体の怪人はどうなったのかな？」

「倒されたわ！」

「全部？」

「全部よ！」

「それは、参ったね……」

ルカンダに貸した時点で予想はしていたが、手間をかけて作成した怪人をあっさり失われるのは、非常に困る。一度作成した怪人はデータバンクから再生が可能なのだが、あの３体の怪人を作るにはそれなりの魔力が必要なのだ。

ルカンダの怪人使いが荒いのか、それとも、魔法少女アルフェリカとノーブル・ローズの力が想定以上に強力なのか。いや、その両方の可能性が高い。

「まったく！　アルフェリカの魔力は前に全部奪ったはずなのに、どうして変身できるのよ！」

「何か魔力を補充する手段を見つけたんだろうね」
「どんな手段よ」
「さあ。分からないよ。僕たちみたいに、若い女性を襲っているのかもね」
冗談交じりにそう言うと、ルカンダの声がますます甲高くなった。
「そんなことより、次の手を考えてよ！　このまま魔力収集を妨害され続けたら、アーク・デュラン様の機嫌が悪くなるわ！」
「落ち着きなよ。そう怒鳴らなくても、策は考えてある」
「……どんな策？」
策があるという言葉を聞いて、ルカンダの声のトーンが少し下がった。
「魔力の伝達を阻害する物質を開発したのさ」
ルカンダに向けて、小瓶の中に入っている液体を掲げて見せる。
「これで魔法少女のステッキを覆えば、彼女たちは魔法を使えなくなるって算段だね」

「……どうやってその液体でステッキを覆うの？　ステッキめがけてその瓶を投げろって言うんじゃないでしょうね」

「うまくステッキに当たればいいけど、確実性に欠けるね」

「確実性どころか絶対に無理よ！」

「だからその役目は、彼にお願いすることにした」

ザバァ！　突然、壁の通気口から、大量のスライムが吹き出した。スライムは床に垂れ落ちると、人の形を作る。

「私が魔法少女の魔法を封じる」

四魔将の１人、グリーヴァだ。

「この液体を彼の体内に注入することで、彼の体そのものが、魔力阻害の役割を果たすことになる。彼が魔法少女のステッキに取り付くことができれば、魔法を封じることができるってわけさ。いい案だろう？」

「確かに、いい案ね」

ルカンダは満足そうに頷いた。

「もう負けは許されないわ。全力で魔法少女を叩き潰す！　バルド、あなたも来なさい！」

「折角のお誘いだけど、遠慮しておくよ。僕はあまり出歩くのは好きじゃないんだ。前に君と一緒に行動して、アルフェリカに殺されかけたしね。僕の代わりに〝彼女〟を誘ってみてはどうかな？」

「レスターのこと？　前にノーブル・ローズに負けて、お気に入りのエビルズ・シャーリーを奪い返されてから、元気がないままなんでしょ？」

「誘い方次第では出てくると予想している。今回の策と、ノーブル・ローズを捕えるチャンスだと伝えれば、きっとね」

「ふぅん。ま、一応誘ってみるわ。それじゃ」

ルカンダが速足で部屋を出ていった。一刻も早くレスターと話をして、出撃したいのだろう。

「では、私の体にその液体を注入してくれ」
「分かった。だが、始める前に言っておくことがある」
「何かな？」
「もう二度と、通気口から出てこないでくれ。前に一度詰まって大変なことになった」
グリーヴァはしばし動きを止め、沈黙していたが、やがてこう言葉を発した。
「……善処しよう」

１３

舞華には、衣・食・住のすべてにおいて、世話になりっぱなしだった。舞華の屋敷に滞在中の私は、何不自由ない生活をさせてもらっている。

さらに舞華は、この世界のことを知らない私に対して、必要な常識を教えてくれた。常識を知っていれば、戦闘中に未知のものを見たとしても、戸惑うことなく戦いに集中できる。あとはこの世界の文字が理解できれば、読み書きができるのだが、流石にそこまでの知識は不要だろう。

（舞華には、いくら感謝しても足りないな）

気がかりなことと言えば、もう1人の魔法少女、小日向沙織のことだ。この屋敷に勤めている家政婦の少女が毎日食事を運んでいるのだが、その食事を摂る以外では、誰とも関わろうとしない。

私がこの屋敷に来て随分経つが、まだ一度も顔を合わせることができないでいた。

（彼女の力も借りることができれば、頼もしいのだが、すぐには無理のようだ）

そして、ある日の夜、屋敷の食堂において、舞華や家政婦の少女と3人で食事をし、しばらく食後の会話を楽しんでいた時のことだった。

「……！　来ましたね」

「ああ……！」

魔力の乱れ。怪人特有の嫌な気配を、肌で感じ取る。

エビルズアークが、また女性を襲おうとしているのだ。

「準備はいい？」

「いつでも行けます！」

私たちは自分のステッキを握り締め、魔力を流し込んだ。体がまばゆい光に包まれ、魔法少女の衣装が出現する。

上半身は白い肌着と薄紫色のローブ。下半身は丈の短い薄紫のスカート。白い手袋とブーツが手足を覆う。髪は輝く金色に変わり、側頭部に髪飾りが装着された。

舞華の方も、白とピンク色で彩られた〝花〟の魔法少女の姿に変貌する。私の仲間が身に着けていたものよりも、どこか気品のある姿だった。同じステッキでも、持ち主によって衣装の細部が異なるようである。

変身を終えた私たちは、家政婦の少女に見送られ、夜の闇へと身を躍らせた。

「この距離と方角は……」

「心当たりがあるの？」

「はい。アルフェリカさんにとって、辛い記憶のある場所だと思います」

「辛い記憶……？」

舞華を先頭にして、夜の風を切り裂いて跳躍を続ける。

やがて、古びた倉庫が目に留まった。

「あそこか……」

確かに、私にとって苦い思い出のある場所だった。この世界に転移したその日、エビルズアークに敗北して、繰り返し辱めを受けた、あの廃倉庫だ。

壁の亀裂から倉庫内の明かりが漏れている。大勢のバイオ兵が、間違いなくこの中にいる。

「罠かもしれない……私が先に突入します。ノーブル・ローズは、後から来てください」

「分かりました」

私は高く跳躍し、自身の重さを操作する。何倍もの重さになった私は、廃倉庫の天井を足で突き破り、倉庫内に突入、着地した。

倉庫内には大勢のバイオ兵がいた。私が着地した衝撃で、何体かが吹き飛び、壁に激突する。

（女性を襲っているわけではない……何を企んでいる？）

バイオ兵が女性を襲っていないのであれば、やはり私たちを待っていたのだろう。罠の可能性が高まる。

「よく来てくれたわね、魔法少女アルフェリカ」

「……！　ルカンダ！」

私に淫らな紋様を刻んだ本人が、正面に立っている。

「ふぅん？　感度を１００倍にしているのに、なんともないように見えるわね？　歩くだけで全身に快感を覚えているんでしょ？」

「黙れ！　こんななもの、私には効かない」
「へぇ？　本当かしら？」
そう言ってルカンダはくすくすと笑う。
（ここで仕留める！）
私は形状変化を行うべく、ステッキを構えた、その時、
「あら？　これが見えないの？」
ルカンダが抱きかかえていたもの。それは、幼い人間の少女だった。
「少しでも動けば、この娘の首、落とすわよ？」
「人質というわけか」
あの少女を盾に、こちらの動きを封じるつもりらしい。これが罠というわけだ。
「さあ、手にしているステッキを渡しなさい」
「……浅はかだな」

「なんですって!?　この娘がどうなっても――」

「ノーブル・ローズ！」

私はルカンダの声を遮って、屋上に控えていた舞華に合図を送った。

「はい！　ソーンチェイン！」

舞華は倉庫内に身を躍らせながら、茨の魔法を発動させた。彼女の手から伸びた輝く茨の鞭が人質の少女に巻き付き、ルカンダの手から奪い取る。

「なっ……！」

ルカンダが慌てた声を出したが、もう遅い。

舞華が私の隣に着地する頃には、少女は彼女の腕の中に納まっていた。

「その子に怪我はない？」

「はい。怪我はなさそうです……あれ？　この子……！」

舞華が訝しげに少女を覗き込んだ、その時、

「今よ、グリーヴァ！」

ルカンダが叫んだ。すると、舞華が助けた少女の体が急に膨らみ、液体になって弾け飛んだ。

「なにっ!?」

「きゃあぁぁっ？」

その液体の一部が、まるで液体自身に意志があるかのように空中を移動し、私と舞華のステッキに張り付いた。

「これは、一体……！　くっ、はがれないっ！」

ステッキを覆い尽くした液体は瞬時に固まり、ぶよぶよとした弾力性のある物質へと変貌する。

「今の子は、人間じゃありませんでした！」

「くっ、これが罠……！」

少女だった物体を構成していた液体の大半は、ぼたぼたと床に落下する。その液体が一か所に集まり、水たまりの中からにょきっと人型のスライムが生えてきた。

「グリーヴァ！」

「また会ったな、アルフェリカ。そして久しいな、ノーブル・ローズ」

「人質に化けて、何のつもりだ!?」

「ははは。Ｄｒ．バルドが作った人間のハリボテはよく出来ている。お前たちも気づかなかっただろ？」

笑っているのか、グリーヴァの顔部分のスライムが波打っている。

「ステッキにこんなものを貼り付けて、何がしたい！」

「私が答えずとも、すぐに分かる……魔法を使ってみるがいい」

「……？」

私はステッキに魔力を籠めようとした。しかし、私の魔力はステッキに届かない。

（まさか、このぶよぶよに覆われたせいで、魔力が伝達できなくなっている……!?）

「アルフェリカさん！　魔法が、使えません！」

隣の舞華も私と同じ状態のようだった。魔力増幅装置であるステッキに魔力を送り込めなければ、満足に魔法を使うことができない。

「こんなものっ……くぅぅ！」

私はぶよぶよの物体を、ステッキから剥がそうとした。しかし、どんなに力を込めても、少しも剥がれる気配がない。

「無駄だ。その液体は一度固まったら、簡単には剥がすことはできない。魔力で肉体強化のできない今のお前たちには、無理だ」

「くっ……！」

罠があることは分かっていた。だが、人質の少女が罠なのだと決めつけて、その裏にある奴らの真意に気づくことができなかった。

これは、私の失策だ。

「ふふふっ。さあ、どうしたの？　魔法が使えないあなたたちに、私たちを倒せるかしら？」

ルカンダが勝ち誇ったように笑う。

正面にルカンダとグリーヴァ。そして周囲には大量のバイオ兵。魔法を使えない状態でこの場を切り抜けるのは至難の業だ。

「アルフェリカさん！　私が囮になります！　その隙に逃げてください！」

「何を言うの！　ノーブル・ローズこそ、ここから逃げて！　私が突破口を開きます！」

「そんなこと、できません！」

どちらが囮役になるのかの議論に、結論は出なかった。なぜなら、

「どっちも逃がすわけないじゃない！」

私たちの背後に忍び寄った気配に気づいた時には、

「つーかまえた、っと！」

私と舞華の身体は、触手に絡めとられていた。

「お前は……レスター……！」

可愛らしい衣装に身を包んだ橙色の髪の女の子。だがその両腕は、途中から太い触手に変わっており、私と舞に巻き付いていた。

エビルズアーク四魔将の１人、アーク・デュランの娘で、触手人間のレスターがそこにいた。

「あはっ！　アルフェリカ！　また会えるとは思わなかった！　そしてローズちゃん！　今度こそ捕まえたんだから！」

ギリギリと、触手が身体を締め付ける。ステッキに魔力を送れない今、その触手を引き剥がすことはできない。

「ぐっ、くぅぅぅ……放せっ……！」

「だーめっ！　２人にはこれから、たっぷり気持ちよくなってもらって、魔力を出してもらうから！」

レスターは無邪気に笑っている。

「さあ、どうしようかな！　アルフェリカには向こうの世界でたくさん虐められたから、そのお

返しがしたいし、ローズちゃんにはシャーリーちゃんを取られた恨みがあるし、簡単には壊さないよ！」

「このっ！　好き勝手に、させるかっ！」

私は魔力を手のひらに集中させて、私を拘束する触手に対して電撃を放った。

「痛いっ!?」

電撃を浴びた触手は一瞬硬直し、締め付ける力を失う。私はその隙をついて、触手から抜け出した。

「どうして魔法を使えるのよ！　話が違う！」

「侮るな！　私は王宮の近衛騎士！　ステッキが使えなくても、魔力さえあれば、これくらいの魔法は使うことができる！」

ステッキを介することで、魔法少女は強大な魔法を行使する。だが、魔力を行使する修練を行えば、ステッキに頼らなくても簡単な魔法ならば使用することが可能だ。

私の魔法を見て、ルカンダが感心したような声を上げる。

「へぇ。ステッキなしで人間が魔法を使うなんてね……でも、そんな威力の魔法で、私たちを倒すことができるかしら？」

（確かに、この程度の電撃では、大したダメージにならない……）

ルカンダの指摘のとおり、ステッキを介さない魔法は出力が低い。バイオ兵１体程度ならなんとか倒せるかもしれないが、四魔将クラスが相手では、大した効果は見込めないだろう。

（ならばせめて、舞華は逃がす！）

舞華を拘束するもう１本の触手に電撃を流し、舞華を救出する。その後は私が囮となって、この場から舞華を逃がす。

舞華が逃げることができても、私は捕まってしまうだろう。この前の時のように魔力を奪われることになるが、２人とも捕まるよりずっといいはずだ。

（魔力を回復できない私よりも、舞華が無事に逃げた方がいいに決まっている！）

私はレスターの触手に電撃を流すべく、魔力を集中させながら床を蹴り――

「大人しくしていてもらおう」

跳び上がった直後の私の身体を、肥大化したグリーヴァの手が掴んだ。

「なっ！　くっ！　魔力が……！」

私の手がスライムに触れると、集中させていた魔力が消え去ってしまう。

「残念だったな。私の体に触れている間は、魔法を使うことはできない」

「ぐっ、このぉぉっ……放せっ……放せえぇっ！」

私はスライムの中でもがいた。しかし、手を動かしても、水の中で泳ぐような感触しかなく、抜け出すことができない。

「アルフェリカ、お前はこっちに来てもらおう」

グリーヴァは肥大化させていた手を引き寄せ、胴体と一体化させた。手に掴まれていた私の身体は、グリーヴァの胴体の中に埋め込まれてしまう。両手両足と背中側の半身がグリーヴァの胴

体に取り込まれ、前半分だけが露出した状態だ。

「出せっ！　くぅぅっ！　動け、ないっ……！」

グリーヴァは体の硬度を部分的に変化させることができる。私の手首足首の部分が硬くなっているため、私は身動きをとることができなくなっていた。

身体が動かない。そして、魔法も使えない。

私はスライムの体内に拘束されて、完全に無力化されてしまっていた。

「アルフェリカの魔力は、私がいただくとしよう」

「あーっ！　ずるい！　じゃあ、私はローズちゃんの魔力をもらう！」

「あなたたち、勝手に……まあいいわ。私は別に魔力に困っていないから、今回は譲ってあげる」

絶体絶命だった。このまま彼らに犯され、魔力を奪われると分かっていても、打つ手がないのだ。

「アルフェリカ、さん、うぅぅ……」

「ノーブル・ローズ……」

私たちは、互いが犯される姿を、ただ見ていることしかできない。

１４

「あの無敵のアルフェリカを、犯せる日が来るとはな」

グリーヴァはそう言うと、体を蠢かせ始めた。２本の触手状のスライムがグリーヴァの体から生え、その先端が、私の両胸に付着する。

「んひっ!?　んぁ、あぁぁぁぁっ……！」

くにくにと、白い肌着の上から吸い付くようにして、私の乳房を揉みしだく。

「やめっ……くぁぁぁぁっ……ぁっ、んっ、ぁあぁぁぁっ……！」

「どうした？　喘いでいるような声を出して。まさか胸を揉まれただけで感じているのではないだろうな？」

「ぐっ……んっ……こんな、ことで……感じたりなどっ……んんんっ……！」

スライムが私の胸をこねくりまわしている。時には押し込むように、時には引っ張るようにして、様々な刺激を与えてきていた。

（まずい……魔法で抑えていた身体の疼きが、強くなって……少しの刺激でも、敏感に反応してしまう……！）

ルカンダに刻み込まれた、感度を上昇させる紋様……それも２重に。合わせて１００倍感じるようになっている私の身体は、グリーヴァの愛撫によって、大きな快感を覚えていた。

「んっ、ぎぅっ……くっ、ぁぅぅっ……ひぅっ!?　そこ、乳首摘まんだら……っくぅぅぅぅっ！」

スライム触手の先端に無数の小さな突起が生え、乳房の上を這いまわっている。その突起は乳首をも捉え、締め付けるようにして刺激を送り込んできた。

「くひんっ、ぁっ、ぅぅっ、ぐっ、ぁうぅぅぅっ……！　ぁっ、んぁっ、く……ぁぁぁっ……！」

「どう見ても感じているのだがな。私を何度も追いつめた最強の魔法少女が、快楽責めで感じる淫乱だったとは。拍子抜けだ」

「ぐぅぅっ……だっ、黙れっ……！　これは、ルカンダの、紋様のせい、っ、くひぃぃっ……！」

「なんだ。やはり感じているのではないか。嘘つきには、これをくれてやろう」

私の股の間から、スライムの触手が生え出てきた。触手は私のスカートの中に入り込むと、下着越しに秘所を擦り始める。

「んあああぁぁっ!?　そこは、だめ、っ……んぁあああぁぁっ……！　く、ぅ、ぁぅ、んっ、ぁあぁぁあぁぁっ!!」

じゅるじゅるじゅる……

秘所の割れ目に沿って、スライム触手が前後に動く。ヌルヌルとした感触が下腹部に甘美な快感を溢れさせる。快感が紋様によって膨れ上がり、私の脳を蕩けさせていった。

「あぅっ、んっ、がっ、ぁあぁぁっ……やめろおぉぉっ……こんなのっ、んっ、耐えられないっ……んいいぃぃっ……！」

「この程度で音を上げてもらっては困る。私の責めは、まだまだ序の口なのだから」

「ぐぁぁっ、ぁっ、ぁあぁぁぁっ……！　服の中に、スライムが入って……んんっ！　直接そんなところ、んぁあっ！　触る、なあああぁぁっ！」

スライムが少しずつ、魔法少女の衣装の中に入り込んでいく。乳房や股間に直接スライムが触れ、愛撫による刺激がさらに増していく。

「ぁぅっ、んっ、ぁっ、ぁあぁぁっ……動き、激し、んんっ！　このおぉっ……もう、やめっ……くひぃぃぃぃっ!?」

スライムが秘所の割れ目の先端部分に吸い付いた。クリトリスへの強烈な刺激に、大きな声が漏れる。

「どうした？　ここが気持ちいいのか？」

「ぁっ、んっ!!　やめっ、ぁんんんっ！　くっ、そこ、は……んぁっ、だめえええぇえぇっ！」

じゅる、じゅる、じゅる……

乳房周辺の肌着の中や、股間の下着の内側に、大量のスライムが潜り込んでいた。胸、乳首、淫唇、クリトリスを同時に愛撫し、絶え間なく快感を送り込んでくる。

（だめ、これ、気持ちいい……今の身体では、耐えられないっ……！）

「ぁうっ、んっ、くうううっ……！　あぁあぁぁぁっ……！　こんな、ことでっ、んんっ、ぁっ、ぁうぅうっ！　ぁっ、だめっ、ぁあああぁっ、だめえええぇえぇっ！」

「身体が震えているぞ？　よもや絶頂するのではないだろうな。アルフェリカとあろう者が、敵に身体を触られて、達してしまうと？」

「ぐっ、誰がっ、絶頂など……んっ、ぁうっ、ぁっ！　んっ、んぁあああぁっ！」

反射的に強がってしまったが、絶頂が近いことなど、グリーヴァには筒抜けだった。徐々に昇ってくる快感の波が、私を押し流そうとしている。

「もっと強く責めてやろう」

ぐじゅぐじゅぐじゅ！

私を責めるスライムの動きが、急激に激しくなった。すでに限界寸前だった私の性感が一気に爆発し、絶頂へと押し上げられる。

「ぁっ！　んあああぁあぁぁっ！　だめっ！　んっ!!　くるぅぅっ！　んっ、ぁっ、イくっ！　イっちゃ……んあああぁあぁぁぁっ!!」

身体全体が、快感で埋め尽くされた。

「イぐうぅうぅうぅぅぅっ!!」

背筋を何度も快感が走り抜け、脳裏に突き刺さる。突き刺さる快感が何度も私の意識を飛ばした。

絶頂により、身体から魔力が放出され、グリーヴァに吸収されていく。

「おおお。魔力が流れてくる。味わい深い、甘美な魔力だ」

（くぅっ……舞華にもらった、貴重な魔力が、奪われたっ……）

「んっ……ぁ……ぁぁ……っぐ、んっ……あぁぁ……」

スライムに拘束された身体がびくびくと痙攣している。絶頂の余韻に包まれた私は、敵に捕まっているという状況を忘れ、ただ快感の残滓を噛みしめていた。

「あっさり達したな、アルフェリカ。最強の魔法少女の名が泣くぞ」

「うぅっ……感度を上げられていなければ、お前なんかに……ぁぅっ……くぅぅ……」

私は悔しさで唇を噛みしめた。身体の感度を操作され、倒すべき敵にあっさりと絶頂させられてしまうという屈辱は、耐えがたいものがある。

「ではそろそろ、中を楽しませてもらおう」

「中……？　ぁっ！　それは……だ、め……」

秘所を擦っていたスライム触手が、男性器を形作る。その反り返った先端部分が、下着の中に侵入し、淫唇の割れ目を探って動き回っていた。

（私の膣内に、スライムが入る……？　これで中をぐちゃぐちゃにかき回されたら、どれだけ気持ちよくなるの……？）

私はスライムの触手を眺めながら、ごくりと唾を飲み込んだ。身体は無意識に快感を期待してしまっている。触手が淫唇を撫でると、背筋をぞくぞくと震えた。

（犯されるのを、期待するなんて、だめなのに……身体が疼いて……もう、我慢、できないっ……！）

「いやっ……やめろっ……んぁっ!?　ぁ……んぃいいいぃいいぃいっ!!」

じゅぶり！

スライムが、膣内に捻じ込まれた。ヌルヌルしたスライムの突起が、膣壁を左右に押し広げながら、奥へ奥へと進んでいく。

「ぅぁ、ぁ、ぁぁ……入って、くる……スライムが、私の中にぃ……」

静かに膣内を埋め尽くすスライム。お腹の中が圧迫される感覚と同時に、膣壁を柔らかく擦ら

れたことによる快感がじんわりと広がっていく。

やがて、挿入されたスライムが、抽送運動を開始した。

「んひっ！　ぁぅっ！　中で、動いて……くひぃぃいっ!?　んっ、ぁ、やめ……んぁあああぁぁっ！」

じゅっぶ！　じゅっぶ！　じゅっぶ！

スライムの触手が滑らかに膣内を出入りしていく。人間や怪人のペニスとは違い、弾力性のあるそれは、何の抵抗もなく、優しく膣内へと突き刺さる。痛みなどなく、ただ快感だけを、私に与えていた。

「んぎぃぅっ！　ぁっ、ぅぁあぁっ……ぁっ、ぁっ、んぁあぁぁぁぁっ……これ、だめえぇぇっ……スライム、中、擦っちゃ……んぁあぁぁっ……！」

スライムが私の膣の形に合わせてその形状を変化させている。全方位の膣壁にスライムが擦りつけられ、一突きされるたびに痺れるような快感が全身へと広がっていく。



（うぅっ……こんなの、続けられたら……快感のことしか、考えられなくなるっ……！）

膣とスライムの結合部からぽたぽたと液体が垂れ落ちている。スライムから飛び散った水分もあるだろうが、その大半は私から分泌された愛液だった。

「ぁぅっ、んっ、んんんっ！　いやっ、ぁっ、んあぁぁぁぁっ……！　耐えないと、んんっ、だめ、なのにっ……ぐぅっ、ぁっ、あぁぁぁぁっ!!」

（快感が強すぎて、我慢できないっ……！　このままだとまた、イかされるっ……！）

「んぁっ、あっ、んんんっ！　だめっ、くりゅっ、んんっ!!　イくっ、イく……イくううぅうぅぅぅっ!!」

快感が弾け、スライムの中で身体ががくがくと震える。

視界が真っ白になり、浮遊感が襲ってくる。感度を強化されているが故の強烈な絶頂により、私の身体から体量の魔力が抜き取られていった。

「ぅあうぅぅぅっ……また、イって……くうぅぅぅっ……」

悔やんでも、失われた魔力は戻ってこない。魔力を吸収したグリーヴァが、満足そうに声を漏らした。

「いいぞ、アルフェリカ。お前の魔力をもっといただく……」

じゅぐっ！　じゅぐっ！　じゅぐっ！

スライムの触手が勢い良く私を抉る。

「んいっ！　ぁっ、あぁぁあぁぁぁっ!!　まだ、イったばかり……ぁっ、んぎいいいいいいいいっ!?　これ、回転して……あぁあぁぁあぁぁぁっ!!」

突然、膣内のスライムが螺旋状に回転し始めた。ぐりゅぐりゅと渦を巻くようにして、私の膣壁を擦り付けてくる。

今までよりも数段強い刺激と快感が私に襲い掛かった。

「ぁぐうぅぅっ、これ、止めろぉおぉぉぉっ……！　んぁあああぁぁぁっ！　んっ、奥まで、抉られて……ぁ、あぁぁぁっ、んあぁあぁぁぁぁっ!!」

「どうだ？　私の責めは。人間のペニスでは到底なし得ない動きだ。存分に堪能するといい」

「ぁうぅぅっ……ぐっ、いぃいぃいぃっ……！　もうやめろおぉおぉおっ！　んぁあぁぁあっぁっ！　またイぐうぅぅっ！　イったばかりなのに、また、くるううぅぅっ!!」

絶頂したくないと思っている。グリーヴァに魔力を奪われたくない。だから、耐えなければならない。

（でも、こんなの、耐えられるわけがないっ……！）

そんな気持ちは、回転するスライム触手に膣奥を抉られ、あっという間に快感に塗りつぶされていく。私はあっさりと、３度目の絶頂を迎えた。

「イくっ、イくぅぅっ、イ――ぎゅううぅぅうぅぅっ!!」

びくびく、びくんっ！

頭ががくがくと揺れ、視界が大きく上下に揺れる。全身の隅々まで快感の波が走り抜け、強烈な脱力感が襲ってきた。

「ぁぐ……ぁ、ぁぅぅぅぅっ……がっ……んっ、ぁぁぁ……」

魔力を失う感覚に包まれながら、私はぼんやりと虚空に視線を彷徨わせた。

（こんなの、続けられたら、頭がおかしくなるっ……快感に、壊されるっ……！）

既に魔法のステッキを握りしめる力も失われ、ステッキは私の手の近くでスライムの中を漂っていた。たとえ魔力を阻害する物質に包まれていなかったとしても、まともに魔法を使うことができる状態ではない。

「ぅぅぅ、ぁぅっ、んんんんっ……もう、やめろぉぉ……これ以上は……あぁあぁぁぁっ！　んっ！　だめえぇえぇぇっ……そんなに激しく……んっ！　んぎいぃぃぃっ!!」

じゅぼっ！　じゅぼっ！　じゅぼっ！

私を抉る触手の責めは、弱まるどころか強くなる一方だった。抽送と回転による二重の刺激で、私の性感はみるみる高まっていく。

胸とクリトリスへの愛撫も続いている。多方面から、１００倍に増幅された快感が襲いかかっ

てきており、どこにも逃げ場がなかった。ただ強烈な波に翻弄され続けている。

「ぁぐっ！　んっ！　ぁっ、だめ、だめえええぇぇぇっ……もうやめろぉぉっ……やめっ、やめてえええぇぇっ……これ以上されたら、わだしっ、ごわれるうぅぅぅっ……！」

「大丈夫だ。魔法少女はそう簡単に壊れはしない。それに、お前は魔力を回復させることができないのだから、今保有している魔力を放出しきるまでもってくれればいい」

「いやあああぁぁあぁぁっ！　んぁあぁぁっ！　ぁっ！　ぅうぅぅぅっ……！　もう、ムリっ……ムリだからあぁぁぁぁっ！　ぁっ！　また、イっちゃうっ……ぁ、ぁ、ぁあぁぁっ……」

大きな絶頂の波が来る。果たして私は自我を保ったまま、この波を受けることができるだろうか。

「イ……ぐぅ……イぐっ！　イくイくイきゅっ！　イぎゅうううぅぅぅっ!!」

絶頂するたびに、快感が大きくなっているような気がする。その大きさは、とてもこの身体には収まりきらないほどだ。

全身が震え、意識が何度も途切れる。快感は幸福感となって私の脳を埋め尽くし、思考力を根こそぎ奪っていった。

絶頂により魔力が失われることも、グリーヴァが倒すべき敵であることも、舞華のことも、何もかも考えられなくなっていく。

快感を貪るだけの雌へと変えられていく。

「また達したか。もはや何の抵抗もできなくなったな」

「ぁぅぅぅっ……もう、やめ……てぇ……」

「残念ながら、止めるわけにはいかない。アルフェリカ、お前が魔力を持っている限りな」

「うぅぅっ……そんな、っ……ぁぁぁっ……」

「最強の魔法少女と呼ばれた者が、根を上げる姿は見たくなかったな。それに私は、まだ手加減しているのだぞ」

「ぇ、っ……？」

全身を愛撫され、膣内を抽送と回転で蹂躙され……これ以上何があるというのか。

「お前が壊れる前に、私の本気の責めを受けてもらおうか」

（一体、何をするつもりなの……？　だめ……これ以上刺激を強くされたら、私、本当に壊れてしまう……！）

「い、や……やめ……やめ、てぇ……！」

「行くぞ！」

グリーヴァがそう告げた瞬間、私を責めるスライムが、いっせいに振動を始めた。

「んぎっ！　がっ！　ぁあぁぁあぁぁぁぁぁっ!?」

ビイイイィィィィン!!

胸を、クリトリスを、そして膣内を責めるスライムの触手が、ブルブルと激しく震えている。

乳首やクリトリスを撫でる刺激に振動が重なって、刺激が何倍にも膨れ上がったように感じられた。そして膣内に挿入されたスライムには、これまでの抽送と回転に振動までもが加わり、私

の体内を激しく揺さぶる。

「あがあぁぁぁぁぁっ!!　これだめっ！　だめだからあぁぁぁっ!!　いやあぁぁぁぁっ!!　スライムが、お腹の中で暴れまわって……乳首もクリトリスも、ぶるぶるって、震え……んひいいぃぃぃぃっ!!　だめえぇぇぇぇっ!!　こんなの、だめえぇぇぇぇぇぇっ!!」

強すぎる刺激はそのまま強すぎる快感へと変わり、私を責め立てる。過剰に送り込まれた快感が私の全身を痙攣させていた。脳に突き刺さるような刺激を受け、額がずきずきと痛む。

「んあぁぁぁぁぁっ!!　イくっ！　イくからあぁぁぁぁっ！　ぁっ！　ぁあああっ!!　イくっ！　イくぅぅっ!!　イ――く――ぅぅ……ぁっ!!　ぅあぁぁあぁぁぁぁぁぁぁっ!!」

絶頂に伴い、大量の魔力が吸い取られていく。心臓が限界を超えて高鳴り、全身の痙攣がいつまでも続いている。

「いいぞ！　濃密な魔力だ。もっともっと、絶頂しろ」

「いやあぁぁぁぁぁっ！　もう、やめてえぇぇぇぇぇぇっ!!　ぁぐっ！

んぎぃいいぃいっ!!　んんんんんっ!!」

じゅっぐ！　じゅっぐ！　じゅっぐ！

ヴィンヴィンヴィンヴィン!!

私が絶頂しても、スライムの苛烈な責めは止まらない。絶頂中の私に対して、さらなる快感を強制的に刻み込んでくる。

（こんなの、続けられたら、死ぬ……私、死んでしまう……！　快感が強すぎて、絶頂したまま、戻ってこない……！）

「うあぁぁぁぁぁっ！　イっ！　イぐうぅうぅうっっ!!　イっでるけど、イぎゅうぅうっ！　またイくっ！　ぁっ！　ぁぁっ！　ぁっ――んんんんんっ!!　ぅあああぁあぁぁぁぁっ!!」

絶頂の合間に叩きつけられる快感でまた絶頂する。連続での絶頂は、片時も私に休息を与えてくれない。

常に絶頂しているという状況に、私は急速に体力と精神力を失っていった。

「ぁっ、ぁっ、あぁぁぁぁぁっ！　んぎっ！　もう、やめでえぇぇぇぇっ!!　もうだめっ！　だめだかりゃあぁぁぁぁぁっ!!　ずっとイっでて、ぁっ、んぎっ!!　またイきゅっ!!　んっ！　いぎぃぃぃぃぃぃぃぃぃっ!!」

「私の本気の責めは強烈だろう？　限界か？　止めて欲しいか？」

「やめてっ！　やめっ、や、んがあぁぁぁぁっ!!　刺激、つよすぎるかりゃあぁぁっ!!　もうやめでえぇえぇぇぇっ!!」

「やめて欲しいのであれば、それなりの頼み方があるだろう？」

敵に対して頼み事をするというのは、とても屈辱的なことのはずだった。しかし、ひらすら与えられ続ける絶頂の苦しみから逃れたい一心だった私は、迷わず懇願の言葉を口にする。

「お願い、だからあぁぁっ！　もうやめぢ、んんんっ！　もうやめて、くださいひぃぃぃっ！　もう限界だからあぁぁぁぁっ!!」

「そんなにやめて欲しいのか」

「やめでえぇえぇぇぇっ!!　お願い、お願いいいぃぃいぃぃっ！　もうじゅぼじゅぼするの、やめえぇぇえぇえぇぇぇっ!!」

「そこまで言うのなら、仕方がないな」

グリーヴァがそう言うと、触手の動きや振動がぴたりと止まった。

「ぅあ……あぅぅぅっ……はぁ、はぁ……」

（やっと、終わった……）

連続絶頂の苦しみから解放され、私は大きく息を吸い込んだ。スライムの触手はまだ膣内に挿入されたままであり、他のスライムも胸やクリトリスに当てられたままだったが、激しい責めはなくなっている。

「んっ、がぁ……うぅぅ……ぁんっ……」

（身体が、熱い……）

執拗に責められた私の身体は、性感が現界まで引き上げられており、感度が１００倍になって

いることによる疼きがとても大きくなっていた。だが、連続で強制的に絶頂させられる苦しみと比べたら、身体の強い疼きなど、大した問題でないように思える。

（かなり魔力を失ってしまった……）

魔力総量の約４分の１が失われてしまっている。その分グリーヴァの魔力量が増えてしまったと思うと、やるせない気持ちになる。

悔しさと悲しさで私は歯噛みする。そこへ、グリーヴァが言葉を浴びせかけた。

「今のうちに呼吸を整えておけ、３０後に再開する」

「え、っ……？」

すぐには言葉の意味を理解できなかった。しばらく反芻して、ようやく恐ろしい事実を告げられたことを理解する。

「まだ、続けるのか……？　もう、やめるって、言ったのに……」

「一時的にやめるというだけだ。魔力を全て放出する前に壊れてもらっては困るのでな。前に言

ったろう。お前に魔力が残っている限り続けると」

私の心が、絶望に塗りつぶされていく。またあの責めを繰り返されると思うだけで、背筋が凍るように寒くなった。だが同時に、強く疼く身体が、快感を期待してびくんと反応している。

「先ほどと同じように、全力の回転と振動で責めてやろう」

「い、やぁ……お願い、やめてっ……やっ――」

「時間だ。再開するぞ」

グリーヴァの宣言どおり、再開された膣内への抽送には、先ほどと同様に、回転と振動が伴っていた。胸やクリトリスへの愛撫も、激しい振動と共に行われている。

「あああぁぁあああぁぁあああぁっ!?」

脳を揺さぶる強い刺激。そして、快感。それは瞬く間に、私を絶頂へと誘う。

「ぁぁあぁぁぁっ！　だめっ！　またイくっ！　イきっぱなしになりゅぅぅっ!!　ぁっ!!　あああぁぁっ!!　イぐっ！　イぐうぅぅぅぅぅぅぅっ!!」

私の魔力は、まだまだ尽きそうにない。

１５

「ローズちゃん！　どう？　気持ち良くなってきた？」

「くふぅっ……気持ち良くなんて、ありませんっ……！」

目の前でアルフェリカさんがグリーヴァに犯されている間、レスターは私を触手で拘束したまま、触手の表面から分泌される粘液を、身体中に塗り続けていました。

粘液には催淫効果があるのか、粘液を塗られてしばらくすると、塗られた部分がじいんと熱くなり、身体が発情していくのが分かってしまいます。

「まだ気持ちよくない？　もっと念入りに塗らなきゃだめかなぁ？」

「くっ、んんっ……っ、はぁ……ぁうぅぅっ……」

私を拘束する触手は、今や数え切れないほどに増えていました。レスターの触手の腕が途中で何本にも枝分かれし、私の胴体や四肢に巻きついて宙に持ち上げています。滑りを帯びた触手に全身を包まれ、身体の至る所に粘液が塗り込まれていました。

「くうっ、もう、放してくださいっ……ぁあぁ……んっ、んんっ……」

触手を破壊しようとステッキに魔力を込めても、魔法が発動する気配は全くありません。やはりステッキに張り付いたゴム状の物質が、魔力を通してくれないようです。私はアルフェリカさんのようにステッキなしで魔法を使う術を知らないので、ステッキが使えなければ、どうすることもできません。

「ねえ、ローズちゃん、本当に気持ちよくなっていないの？　身体が熱いとか、そういうのは？」

「そんなこと、ありません……！　無駄なことはやめて、これ、ほどいてくださいっ……！」

本当はもう、全身が熱く疼いてどうしようもないくらいです。手が自由なら、無意識に性感帯

を触っているかもしれません。

ですが、エビルズアークを相手に、弱みを見せるわけにはいきません。しつこく訪ねてくるレスターに対し、あくまでも私は否定の言葉を繰り返します。

「おかしいなあ。強い媚薬の効果があるはずなんだけどなあ……そうだ！」

レスターが、何かを思いついたような声を上げました。

「皮膚に塗っても効かないのなら、直接身体の中に流し込めばいいんだ！」

「何を――っむっ!?　んぷぐっ!?　んみゅうううぅぅぅっ!!」

突然、１本の触手が、私の口内に捻じ込まれました。

（触手の粘液が、口の中にっ……！）

触手が舌の上を滑り、口内に粘液を擦り付けてきます。甘く、濃い香りが口の中に広がりました。

「じゅぐっ！　んっ！　みゅぐるむっ！　んぐっ、んっ……じゅぐれぅっ……！」

触手が口の中で粘液を撒き散らしながら暴れ回っています。喉の奥へと流し込まれた粘液が強制的に食道へと送り込まれると、身体の芯から疼きが巻き起こりました。

（これは、ダメですっ……！　身体が、ますます敏感になってしまいます……！）

既に高まっていた性感がさらに引き上げられ、私は目眩を感じました。触手に撫でられている肌が、明らかに快感を生じさせています。心地よい刺激に、もっと撫でられたいと、身体が無意識に求めていました。

「ぷるぐぅっ！　んむっ！　むぐぐっ……！　んみゅっ！　んっ！　ぷぐぅぅぅっ！」

じゅっ！　じゅっ！　じゅっ！

触手が口の中で抽送運動を行っています。執拗に粘液を口内に塗り込まれたことにより、触手が擦れる感触が、快感に変わろうとしていました。

これ以上口の中を辱められるわけにはいきません。そう思いましたが、力強く口内を行き来する触手の動きは、私が舌で押し出そうとするくらいでは、弱めることができません。

「んみゅぐるっ！　むぐ、むじゅるれぅ……！　んぐっ！　んぐぅぅぅっ……！　んんんっ！」

「どう？　ローズちゃん、少しは気持ちよくなってきた？」

小柄なレスターが私を見上げながら訪ねてくる。

（ダメっ……快感に流されては、いけませんっ……！　気を強く持たないと……！）

「んぐっ！　んぐぅぅぅっ!!　むっ、じゅぐっ、れぅっ……きもひよくなんか……ちゅぶっ、むっ……なひ、でふっ……むるぐじゅっ……！」

私は触手に邪魔されながらも、必死で否定の言葉を紡ぎました。無理に言葉を発したせいで、口の端から唾液と触手の粘液が混ざった液体が垂れ落ちていきます。

「本当にい？　うーん……まあ、いいや、ローズちゃんを媚薬だけで気持ちよくさせるのは飽きちゃった。媚薬で気持ちよくならないのなら、直接触って、気持ちよくするね！」

レスターの触手が蠢き、私の両胸に、勢い良く巻きつきました。

「んみゅっ！　んっ！　んぐぅぅぅっ！」

同時に、私の股の間にも触手が1本入り込み、私の大事な部分を表面で擦り始めます。

（……！　なに、これっ!?　少し触られただけで、こんなに、気持ちよくなって……媚薬を塗られて、身体が、敏感になりすぎていますっ……！）

「うぐぅぅぅっ、んっ！　んぎゅぅぅっ……！　んっ！　ぐんんっ!!」

「どう？　気持ちいい？　あはっ！　その様子だと、気持ちよくなってくれたみたいだね！」

「んぐ……んぐぅぅ……んぐむじゅぅ……」

私は否定の言葉を発することができずに、呻き声を漏らしました。事実、私は過敏に快感を覚えています。胸や股間を撫でられるだけで、びくびくと背筋が震えてしまいます。

「これなら、イってくれそうだね！　どんどん激しくするよ！」

細かい触手が、肌に這うようにしてコスチュームの内側に侵入してきます。触手たちの多くが胸に群がり、ブラジャーの内側に入り込んできました。

「んぐぅぅぅっ……！　んっ！　んむぅぅぅっ！」

（そんな、直接胸を、ぐにぐにしちゃ、ダメですっ……！　ああ！　触手が乳首に巻きついてきますっ……！）

ヌメヌメとした粘液が、肌とコスチュームの間に張り付く気色の悪い感触に、私は顔をしかめます。ですが同時に、乳首を弄られたことによる快感が、胸の奥に湧き上がりました。

「じゅぬっ、んっ！　ぶぐぅぅ……んっ、んっ……んんんっ！」

（乳首弄られると、身体が、びくびくって、震えてしまいます……乳首でこんなに感じるなんて……ダメ、くにくにしちゃ、ダメですっ……！）

股間にもう1本触手が伸び、私のショーツの股間部分を、ぐいっと横にずらしました。これまでショーツ越しに秘所を擦っていた触手が、直接大事なところに触れ、媚薬粘液を塗り込んできます。

「んっ！　んんっ！　むぃぐっ、じゅっ、ぷりゅぐぅぅ……！」

滑らかな触手の表面が勢いよく私の秘所を擦っています。淫唇の割れ目の先端部分を強く擦ら

れると、腰の後ろが痺れるような強い刺激に襲われました。

（気持ちよくなっちゃ、だめなのに……胸とあそこ、同時に責められると、気持ちいいの、抑えられない……！　ヌルヌルの粘液がどんどん塗られて……私の身体、さらに敏感になっています……）

「じゅむ、んっ、ぐぐっ……！　っぷ！　りゅぐじゅっ、ぐむ、むるぅぅぅっ……！」

（気持ちいいの、昇ってきて……あぁ、溢れてしまいそう……絶頂、してしまいそうです……！）

私も女です。火照る身体を自ら鎮めたことはあります。絶頂も、経験したことがあります。

しかし、媚薬により身体を敏感にされ、全身への愛撫という未知の刺激により、かつてない勢いで高められた性感が、どのような形で弾けるのか、想像もつきません。それはとても気持ちいいことなのでしょうか。いけないことだと分かっていても、身体はそれを求めていました。

「るぐっ、むっ、んっ、んっ、んんっ！　んんんんっ！」

（ダメっ、きますっ！　大きいの、来ちゃいますっ！　あっ！　イくっ！　イきますぅぅぅっ！）

しかし、私が絶頂を迎えようとした、その直前で、

（あ、れ……？）

激しく蠢いていた触手の動きが、ぴたりと止まりました。

「ぐっ……むくぅ……？」

「イきそうになってた？　でも、まだだーめ！　そう簡単にはイかせないから」

触手の動きは、レスターが意図的に止めたものでした。私が絶頂寸前の状態であることを分かっていて、あえて責めを中断したのです。

（どうして……？　私を絶頂させて、魔力を奪うのではないのですか？）

突如刺激を失った私の全身は、苦しいほどの疼きに襲われていました。無意識に腰が動き、秘所を触手に擦りつけてしまいましたが、その程度の刺激では、あと一歩、絶頂には届きませんでした。

「ねえ、ローズちゃん！　あなた、処女なんでしょ？」

「……んふぐぅ？」

１本の触手が、私の下腹部を撫でまわします。皮膚の内側にある、膣や子宮の存在を、嫌でも意識してしまいます。

「ローズちゃんをイかせるのは、ローズちゃんの処女をもらってからって決めてるから！」

よく分からないことをレスターは言います。私を絶頂させることと、私の純潔を奪うことに、何の関係があるのでしょうか。

「……むぷるぅっ！　がっ……はぁ、はぁ……」

私の口から触手が引き抜かれました。

「さあローズちゃん！　イかせてほしかったら、触手を挿入してほしって、その口で私にお願いしなさい！」

「えっ……？」

「ローズちゃんの処女を、私に捧げてくれたら、イかせてあげる！　だから言うの！　『私に触

手を挿入してください』って！」

「そんなことっ……」

言えるはずがありません。私の初めての相手が、こんな触手だなんて、考えるだけでおぞましい気分になります。いくら身体が疼きを発し、快感を求めているからといって、私がそのようなことを口にすることは、ありえません。

「言わないの？　いいよ！　いつまで耐えられるか、楽しみ！」

じゅるじゅるじゅる。触手が再び蠢き始めました。全身を這いまわり、胸を揉みしだき、乳首を摘まみ、淫唇を擦ってきます。

「ぁうっ、んっ……ぁっ、くぁあぁっ……ぁっ、んっ、ぁ……んぁあぁぁあっ……！」

媚薬の効果で敏感になっている私の身体は、その刺激でまた多くの快感を生み出してしまいます。

「んっ、ひうっ……！　ぁっ！　んっ、ぁあぁぁあっ！　だめっ……んっ……！　くぁあぁぁっ…

…！」

昂る身体。募る絶頂への渇望。しかし、私が絶頂へと至る直前で、

「はい、おしまーい！」

またも触手の動きがストップしてしまいました。

「ぁぐぅうぅうぅっ……！　んん、んぁぁぁ……ぁぁぁ……」

私はうめき声を上げながら、もじもじと身をよじりました。こうでもしないと、強い疼きがもたらす苦しみにより、気が狂いそうです。

「どうしたの？　切なそうな声を出して！　そんなにイきたかった？」

「ぐぅぅっ……イきたくなんか……ない、ですっ……」

「本当にい？　ま、いいけど！　イきたいなら、早めに挿入してってお願いした方がいいよ！この先どんどん辛くなるから！」

既に音を上げそうになっている自分がいました。気を強く持たないと、イかせてくださいと思

わず口に出してしまいそうな状況です。

ですがそれは、私の純潔と引き換えです。私の口から、純潔を奪うように言うことは、やはりできません。それになによりも、私が絶頂すると、私の魔力をレスターに奪われてしまいます。エビルズアークと戦う魔法少女として、自ら絶頂を望むことなど、あってはなりません。

「っ……うあぁぁっ!?　んっ、ぁあぁっ、んっ、んんっ！　あああぁぁぁっ……！」

三度触手が蠢き始めました。私に快感を与えるために、そして、絶頂の寸前まで追い込むために、全身をくまなく責め立ててきます。

（私は、こんなことで、負け、ませんっ……！　耐えないと……イきそうになっては、ダメですっ……！）

「あぐっ、んぁあぁぁぁっ……ぁぁ、身体、どんどん熱く……んひぃっ！　んぁっ、ぁっ、ぁあぁぁぁっ！」

我慢しようと思っても、媚薬で火照った身体への全身愛撫により、ほとんど抵抗することを許

されません。私は簡単に、絶頂へと押し上げられていきます。

「そろそろイきそう？」

「くっ、うぅぅぅっ……あっ、んぁっ、イったりなんか……あっ！　んぁっ、ぁ、ぁ、ぁあぁぁぁっ……！」

（ぁっ、イくっ、イ、くぅぅっ……！　イっちゃいますっ！）

「っあぁぁ……あっ！　く……あぁぁぁっ……」

絶頂することはできませんでした。触手の動きが止まり、刺激を取り上げられた身体は快感を得ることができず、切ない疼きに包まれて震えました。

「うっ……うぅぅ……ぁ、ぁぁ……ぁぁ……」

（こんなの、苦しすぎます……絶頂できないのがこんなに苦しいなんて……）

イかせてほしい。もう誤魔化しようもなく、私はそれを望んでいました。純潔と引き換えとなる絶頂。等価交換には程遠いはずのその取引も、悪くないように思えてしまいます。

（だめ……そんなの、だめっ……私の純潔は、いつか大切な人ができた時に、その人に捧げるのだから……こんなところで、敵に差し出しては、だめえぇっ……！）

私は歯を食いしばって疼きに耐えながら、自分に言い聞かせました。ですが、こんなことを続けられて、いつまでも耐えられるのか、自信がありません。

「ぁうっ、んっ、ぁぁぁ……ひうっ!?　んぁっ！　ま、またぁぁ……んっ、ぐ、ううぅぁぁ……！」

「そろそろ挿れてほしくなったでしょ？　ねえ、ねえ？」

「ぐっ、いれてほしくなんか、くぁっ、んんっ……！　ない、ですっ……！」

「ほんと、強情なんだから！」

じゅるじゅるじゅる……ぴたり。また触手の動きが止まりました。

「うあぁぁぁぁっ……んっ、ぁ……ぐぅ……」

視界がかすみ、頭がぼおっとしてきました。もう、何も考えられません。

ですが、これでいいのかもしれません。何も考えずに、心を閉ざしてしまえば、この苦しみから解放されるでしょう。

「ぁぅっ、んっ、んんっ……うぅ……」

何も考えず、何も感じず、ただ人形のように、じっとしている。そうなれば、こんなことを続ける意味がなくなります。

「ローズちゃん？　あれ？　反応しなくなっちゃった」

「……」

そう。私は人形です。人形は黙って、虚空に視線を彷徨わせるだけ――

「飽きちゃった。もう犯すね」

「ぇ……？」

ひゅん、と風切り音が聞こえた次の瞬間、１本の太い触手が、乱暴に私の淫唇の中に割って入り、膣の奥深くまで到達しました。

「ひっ、いっ、ぁあああああぁあぁあぁあぁあぁあっ!!」

私の純潔が、散らされました。

「んっ、ぎいぃいいいいぃぃっ!!　痛いっ！　んあぁぁぁっ！　んぎぁあああぁぁぁっ!!」

（あれ……？　私の初めて、奪われた……？　こんなに簡単に、あっさりと……？）

破瓜の痛みが、下腹部から全身に広がっていきます。未だかつて感じたことのない激痛に、私は絶叫しました。触手が突き刺さった下腹部が、じんじんと鈍痛を発しています。

「ううぅぅぅっ!!　痛ひぃいいぃぃっ……！　言ってないっ!!　入れてって、言ってないのにいいいぃぃっ……！　こんな、こんなの、ひどすぎるぅぅうぅぅっ……!!」

瞳から大粒の涙が零れ、頬を濡らしていきます。それは大切なものを失った悲しみによるものでしょうか、それとも、下腹部を埋め尽くす異物の痛みのせいでしょうか。もう私には分かりません。

（太い触手が、お腹の中に……私のあそこが、広げられちゃってます……！）

「ひぎっ!?　触手が、動いて、やっ、あっ！　んぁあぁぁあぁぁっ!?」

挿入された触手がずるりと引き抜かれたかと思うと、再び膣奥まで挿入されました。膣壁を触手が擦ったことで、強烈な快感が生じました。背中がぞくぞくと震え、痙攣したようになってしまいます。

「ぁ……動かないでくださ、っ、んぁっ！　ぁっ！　あぁぁぁあっ!!　そんなっ、激しいですっ……んんっ！　んぁぅぅぅっ!!」

じゅちゅっ！　じゅちゅっ！　じゅちゅっ！

触手が勢いよく私の膣内を往復しています。これまで挿入を許してこなかった私の膣が、いきなり乱暴に蹂躙され、大きな痛みが生じています。しかしその痛み以上に、敏感な部分を擦られたことによる快感も生じていました。

長時間媚薬を塗られ、何度も絶頂を焦らされ、感度が限界まで高まっていた私の身体は、触手の責めに抗うことができそうにありません。

「ぁうっ！　んぁあああぁぁあっ!!　ぁっ！　いやあああぁぁあっ!!　こんな、んんっ！　いやあああぁぁあっ！」

（ダメっ、こんな、触手で……触手に突かれて、イくっ、今度こそ、イっちゃいますっ……！）

「んはあああぁぁあっ！　んっ、イぎます！　んぁあああぁ……イくっ、イくうぅうっ！　んんんんんっ！」

「いいよ！　イっちゃって、ローズちゃん！」

「あああああぁぁあぁぁあっ！　イくっ！　イぐうぅうぅうぅうっ!!」

（気持ちいい……こんなの、知りません……気持ちよすぎて、おかしくなっちゃいます……！）

びくん！　びくん！　私の身体が私の意志とは無関係に痙攣し、小刻みに震え続けています。

両手両足の指が大きく広がり、震えながら硬直していました。

「ぁぐっ……んっ、きゅうぅう……ぁっ、ぁ……ぎっ……んうぅうっ……！」



快感の波が過ぎ去った後、残ったのは大きな脱力感と、さらに大きな幸福感でした。全身の硬直が解けると、両手両足に一切力が入らず、だらりと垂れ落ちます。

（私、絶頂、してしまったのですか……？　体に、力が入りません……）

すると、体内の魔力が、挿入されている触手を通じて、レスターに吸収されていく感覚がありました。これが、魔力を奪われるということなのでしょう。

「う、ぁ……魔力が……私の魔力、うぅぅぅ……」

「ああ！　ローズちゃんの魔力、すごい！　とっても美味しい！」

魔力を得たレスターが嬉しそうに飛び跳ねています。

「もっと！　もっと頂戴！」

「ぅぁぁ……あぁぁあぁぁっ！　また、んんんんっ！　そんなに激しく、動いちゃ、ぁあああぁぁっ！　だめっ、だめえええええぇぇっ!!」

じゅっぽ！　じゅっぽ！　じゅっぽ！

触手が強く深く、私を抉ります。先ほどよりも抽送の速度が上がり、強烈に膣壁を摩擦してきました。

「あぅぅぅぅぅっ！　これ、だめですぅぅぅぅっ！　触手が、お腹の中で、暴れ、んんんっ！　あっ！　いやぁあぁっ！　そんなに激しくされたら、お腹の中、壊れちゃうっ!!」

触手がしなりながら私を突き刺し続けています。触手が深く挿入されるたびに、私から溢れた愛液が結合部から噴き出していました。

痛みはもうありません。あるのは、気が狂うほど強い快感だけです。

「あっ、んぁあぁぁぁあっ！　こんなの、んんっ！　耐えられませんっ……！　あっ！　ああああっ！　嫌なのにっ……んんんっ！　また、イっちゃいますっ……ぅあああぁぁっ!!」

「我慢しないで、イっちゃって！　もっと私に魔力を頂戴！」

「んぁあぁぁっ！　ダメっ、んぁあぁぁぁっ！　ダメっ、あっあっ、あああぁっ！　イくっ、イくぅぅぅぅぅっ！」

触手がとどめとばかりに、私の身体が持ち上がるほどの勢いで突き刺さり、私は達しました。

「イきゅうううぅぅぅぅぅぅっ!!」

「あはっ！　またイった！　全身が痙攣してる！　面白い！」

再び魔力がレスターに吸収されていきます。レスターが笑いながら、至近距離で私の顔を見上げていましたが、呼吸をするのに必死で、そちらを見る余裕はありません。

「ぁぁぁ……んっ、く、うぅぅ……あっ、ぁぁ……ぁ……うぅ……」

「魔力ありがとう、ローズちゃん！」

レスターの触手が、私の頬を撫でました。その刺激ですら、私の身体は敏感に反応し、びくっと腰が跳ねてしまいます。

「じゃ、続き！」

「んひっ！　いやっ！　ああぁっ！　もう、いやあああぁぁっ！　やめて、くださいっ！　これ以上気持ちよくしないでえぇぇぇぇっ!!」

触手は激しく私を抉り続けます。じゅぶじゅぶと、私のあそこがいやらしい音を立てていました。その音をレスターに聞かれていると思うと、恥ずかしさでますます身体が昂ってしまいます。

「ぁぅうぅぅっ……だめ、ですぅぅ……あぁぁ！　身体中、触手に撫でられて……おかしくなってしまいますっ……んっ、ああぁぁぁぁっ……もう、やめてえええぇぇっ……！」

身体中にまとわりつく触手の群れ。全身を同時に撫でまわされ、膣内への快感が増幅されているように感じられます。細い触手が淫唇の割れ目の先端にある突起に巻き付き、くいくいと引っ張ると、強制的に快感が引き出されます。

「ぅうぅぅぅっ！　んんっ！　あっ!!　ぐひぃいいいぃぃっ！　んっ！　いやっ！　ぁぁあぁぁっ！　もういやあああぁぁあぁぁっ！　やめでっ！　もう、やめてくださいぃいいぃっ！　んあああぁぁぁぁぁっ!!」

じゅちゅっ！　じゅちゅっ！　じゅっちゅ！

激しい抽送に快感が脳に突き刺さり、眩暈がします。快感から逃れようと、僅かな力でもがい

てみても、触手の拘束からは抜け出すことができません。

そして、またあっさりと、触手によって達してしまいます。

「あんっ！　んっ！　ひぅっ、ぁっ、んっ、んぁあああぁぁぁぁっ！　ダメっ！　ダメっ、ダメえええぇぇっ!!　またイくっ！　イくうぅぅぅぅっ！　イっちゃうぅぅぅぅぅっ!!　イっ――ちゃ――ああぁぁあああぁぁあぁぁぁっ!!」

びくびく、びくん！　一際大きな絶頂に、私の身体が大きく反り返りました。絶頂のたびに、私の身体は悲鳴を上げています。このままだと、魔力が尽きるより先に、私の身体が壊れてしまいそうです。

「ぁっ、ぅぅぅ……んっ、ぐ……ぁぁ……お願い、もう、やめてください……これ以上されたら、私、私っ……ぁぁぁ……」

「何？　ローズちゃん、もうやめてほしいの？」

「はぁ、はぁ……やめて……ください……もう、ムリ、ですっ……」

「うん！　無理なのはわかった！　でもやめない！　もっと魔力、欲しいから！」

レスターの無慈悲な宣言で、触手の責めが再開されます。

「んいあああぁぁあぁぁぁっ!!　やっ、あぁぁぁぁっ！　んんんんっ！　もうイきたくないっ！　イきたくないんですうぅぅぅっ！　んっ、ぁあああぁぁあぁぁぁっ!!」

ぐじゅっ！　ぐじゅっ！　ぐじゅっ！

触手は容赦なく私を責め続けました。

それから何度も何度も、私は絶頂を繰り返しました。

心が、徐々に絶望に犯されていくのを感じながら……

１６

「ぁぁぁぁ……イぐっ……イっ……!!　ぁっ！　ぁぎぃぃぃっ！」

絶頂し、魔力を吸収されるのは何度目だろうか。

グリーヴァに辱めを受けて、どれくらいの時間が経過したのか、もはや分からない。何度も何度も絶頂を強要され、私の魔力は半分以下にまで減ってしまっていた。

「がはっ……ぁ……ぅ……ぁ……」

すでに頭を支える力もなく、私はがっくりと項垂れたまま、スライムによる責めを受け続けている。

「これ以上は、過剰共有だな」

ふと、グリーヴァがそう呟くと、私の体がぐらりと傾いた。

「ぅ……ぁあぁぁ……？」

グリーヴァに拘束されていた手足が解放された。スライムまみれになった私の身体がずるりとグリーヴァの体内から滑り落ち、仰向けで床に崩れ落ちる。

「はぁ、はぁ……ぐっ、うぁぁ……？」

「あら？　どうしたのグリーヴァ。まだ変身が解除されていないわよ。魔力、残っているんじゃない？」

倒れた私を、ルカンダが覗き込む。こちらが万全の状態なら致命的な一撃を叩き込むことができる距離なのに、それは叶わない。魔力を通さない液体で覆われたステッキは私のすぐそばに落ちており、ルカンダはそれを拾い上げた。

「私の体内に、かつてない量の魔力が蓄積されている。これ以上吸収しては、魔力が暴走し、私の形状維持に支障が出る恐れがある」

「ふぅん。そういうものなの？」

「残りはお前が吸収したらどうだ、ルカンダ」

「直接犯すのは私の主義じゃないからバイオ兵に譲るわ。魔力吸収の紋様を付けてあるから、バイオ兵が吸収しきれなかった分の魔力は私に流れてくるし……さあ、バイオ兵たち！　好きに犯

しなさい！」

ルカンダの合図で、周囲で待機していたバイオ兵が、ぞろぞろと私に群がってくる。

１体のバイオ兵が私の脚を掴み、大きく広げながら、倒れる私の身体を横向きにした。

「ぐっ……やめ、ろ……放せ……くっ、このぉぉ……！」

バイオ兵の股間の突起が私に迫る。バイオ兵は私の片足を抱きかかえるようにして胸元に近づけながら、ぐいっと腰を突き出した。

「んぎっ、ぁ、ぁあぁぁぁっ……！」

ずぶり。人間よりも一回り大きなサイズのペニスが私の膣内に侵入した。弾力性のある柔らかいスライムと違って、こちらは硬く、確かな挿入感がある。

（こんな、雑魚にまで、犯されるなんて……魔法さえ使えれば、こんな屈辱っ……！）

ぐじゅっ！　ぐじゅっ！　ぐじゅっ！

バイオ兵は私に挿入するや否や、激しく腰を打ち付けてきた。横向きに寝ている私の膣内を、

斜めにペニスが抉ってくる。

「んぁっ、ぎっ、ぁあぁっ！　ぐっ、奥にっ、当たって、んぁあぁっ！　角度がっ、んっ！　あっ！　あぁぁぁっ！　んぁあぁぁぁぁぁっ!!」

ペニスの先端が、膣奥の隅に突き刺さり、とてつもない量の快感が生み出された。その場所が私の弱点だと、バイオ兵はすぐに把握したのか、連続して同じ場所を的確に突き続けてくる。

（くぅぅ、そこは、だめだっ……気持ちいいところ、何度も突かれて……身体が、反応してしまうっ……！）

「ぁあぁぁぁっ！　んっ、ぁっ、ぁっ、ぁあぁぁっ……バイオ兵なんかに、犯されて、んぁっ……ぁ、だめ……イくぅ……イってしまうっ……ぁ……ぁ……ぁあぁぁ……！」

バイオ兵の腰の動きがどんどん加速していき、最後に勢いよく、ずん、と子宮口を叩いた。

「イ、くうぅぅぅぅぅぅぅっ!!　んっ!!　あああぁぁあぁぁぁぁっ!!」

（イかされた……バイオ兵なんかに、あっさりと……くぅぅ……こんな淫らな身体にされていなければ、こんな奴にっ……！）

魔力がバイオ兵に吸い取られていく。一度の絶頂で、十分な魔力を吸収したのか、私を犯していたバイオ兵は、突き刺さっているペニスを引き抜いた。

「ぅぁぁ……はぐっ……うぅ……ぁ、もう、やめ――んぎいいぃぃぃぃっ!!」

すかさず別のバイオ兵が私の脚を掴み、膣内にペニスを挿入する。私の周囲を、大勢のバイオ兵が取り囲んでいた。その数は、とても数えきれない。

「そうよぉ。時間が惜しいから、次々と犯し続けなさい」

「ぅっ、がぁぁぁっ、んっ、ぁうぅぅっ……もう、やめ……あぁぁぁぁぁっ!!　んっ、ぐぁぁぁっ！　ぁっ、んっ、くうぅぅぅぅっ……！」

じゅぶっ！　じゅぶっ！　じゅぶっ！

バイオ兵の巧みな責めに、感度が跳ね上がった私の身体が、耐えられるはずがなかった。バイ

オ兵のペニスによって擦られた膣壁は悦び、どろどろに濡れそぼっている。まき散らされた愛液が床を染め上げていく。

（あぁっ、気持ち、いい……嫌なのに、全然、我慢できないっ……！　ぁっ、またイかされるっ……イかされてしまうっ……！）

「イくっ、イ、くっ……あぁぁあぁぁぁぁっ!!　イぐうぅぅぅぅぅぅっ!!」

快感が弾け、激しい絶頂に飲み込まれた。横になった身体が、水揚げされた魚のようにびくびくと跳ねた。

「バイオ兵が吸収しきれない魔力が流れてくるわぁ。プリズム・シャーリーは２～３回イかないと魔力が溢れなかったのに、あなたは１回でそうなるなんて……それだけ気持ちよくなったってことかしら？　ふふふ、とっても淫乱なのね」

「ぐっ、このおぉぉっ……感度を強化しておいて、よくも……んあぁぁぁぁぁぁぁっ!!　また、ペニスが、入ってくるぅぅぅっ……！」

３体目のバイオ兵がペニスを挿入する。背筋に快感が走り、身体が大きく反り返った。

「何？　何か言いかけていたようだけど、気持ちよすぎて忘れちゃった？　感度が強化されていても、そんなに感じているってことは、元々淫乱だったってことよ。認めなさい」

「ぁぐっ、んっ、そんなことは、ないっ……！　あぁぁぁっ、ぁっ、んっ、ぁぁぁぁぁぁぁ……！」

「そういう台詞は、少しは快感を抑え込んでから言いなさいな。蕩けきった顔をしながら言っても、嘘だってすぐ分かるわよ」

ルカンダはにやにや笑いながら私を覗き込む。雑魚であるバイオ兵に犯されている無様な私を、心底嘲笑っているようだった。

「ぐっ、ぁっ、んぁぅぅっ……このぉぉっ、ルカンダ……お前は私が殺してやる……んんっ、絶対に、殺すっ……！」

「あらあら。前にも殺すって言っていたけれど、まだ私は生きているわよ？　そもそもそんな状態で、どうやって殺すっていうの？　やってみなさいよ」

「くぁっ、ぐっ、くぅぅぅぅぅっ……ぁっ、ぁあぁぁぁぁっ……んっ、ぁあああぁ！」

「もうイきそうになってるわね。さあ、バイオ兵！　この愚かな魔法少女を盛大にイかせてあげなさい！」

ルカンダの合図で、バイオ兵の腰の動きがさらに早くなった。限界寸前だった私の性感が、一気に弾ける。

「あぁぁあぁぁあぁ!?　だめ、っ、ぐっ、あぁっ！　んんんんんっ!!　イくっ……イってしまうっ……このおおぉぉぉっ……イきたくない、イきたく――ぁっ、あぁぁあぁぁっ！　あああぁぁあぁぁぁっ!!　イぐっ！　イ、くぅ……んあああぁぁあぁあああぁぁあああぁぁっ!!」

身体がまるで言うことを聞かない。憎い敵を前にしても、絶頂を我慢するどころか、快感を少しも抑えることができない。

（このまま犯され続けたら、心が折れてしまう……身体汚されても、心まで汚されるわけには、いかないのにっ……！）

ずるり。バイオ兵のペニスが引き抜かれる。私は束の間の休息時間を得て、唾液まみれになった口で必死に呼吸を行っていた。

その時、

「もう飽きちゃったから、そっちにあげるね！」

「はうぅぅっ……！」

どちゃり。

レスターの触手によって投げ飛ばされた舞華が、私のすぐ横に落下した。

「舞華っ……！　あぁぁ……大丈夫……？」

「うぅぅ……アルフェリカさんこそ……大丈夫、ですか？」

粘液まみれで虚ろな表情をしている舞華は、それでも私を気遣うような言葉を発した。そのか細い声から、心身ともにかなり疲弊していることが伺える。

「あら？　レスターもお腹いっぱい？」

「う～ん。魔力はもう少し吸収できると思うけど、ローズちゃん、ほとんど反応しなくなっちゃって、飽きちゃった。私は優しいから、残った魔力はバイオ兵やルカンダにあげるね！」

「飽きたって……ほんと、あなたって気まぐれよね」

呆れたような声を出すルカンダ。私はそんなルカンダに対し、

「頼む……ノーブル・ローズは、もう解放してくれ。魔力なら、私が渡すから……」

と言った。敵に頼みごとをするのは、屈辱的でとても抵抗があった。だが、舞華を救うためなら、それくらい、どうってことはなかった。

私はどうなってもいい。だが、この世界で私を救ってくれた、この心優しい魔法少女だけは、助けなければならない。その一心で、私はルカンダに頼んだ。

しかし……

「あらぁ？　魔法少女同士の友情かしら？　とても美しいわね。でも駄目よ。２人とも、魔力が空になるまで犯すに決まっているじゃない」

予想していた反応だった。さらにその後に、無慈悲にこう付け加える。

「特にノーブル・ローズは、魔力を自分で回復できるんですもの。基地に連れ帰って、苗床で一生魔力を生み出し続けてもらうわよ」

「な、にっ……そんなこと……！」

「あたりまえじゃないの。私たちは魔力が欲しいの。プリズム・シャーリーの時は、早く魔力を回復してもらうために、いちいち解放していたけど、それだとまた戦うのが面倒なのよね。今回は解放せずに、ずっと犯し続けてみるわ」

そんなことをされたら、舞華が壊れてしまう。

「やめろ……そんなこと、許さないっ……！」

「許さない？　じゃあどうするの？　ノーブル・ローズをここから逃がす？　ふふふ。できるものならどうぞ？」

「くっ、このおぉおぉっ……！」

「忘れないうちに、ノーブル・ローズにも、紋様を刻んでおかないとね」

ルカンダはそう言いながら、舞華の下腹部に指を這わせ、怪しい紋様を描いていく。

「やめ、ろ……舞華に、触るな……」

「アルフェリカと同じように、感度１０倍の紋様を２つあげるわ」

ルカンダの指が這うと、舞華がびくんと身体を反応させた。

「ぁ……ぁ……？　ぁぁ……？」

「感度が１００倍になった気分はどう？　とても気持ちいいでしょ？」

「く、ぁぅ……ぁ、これ……んぁぁぁ……」

舞華は口を大きく開いて、天井を凝視していた。急激な感度の変化に、どう対応していいか分からないのだ。

「バイオ兵が吸収しきれない分の魔力を、私に流す紋様も刻まないとね」

ルカンダは舞華の胸にも指を這わせる。

「これでよし。さあ、バイオ兵、続きよ。２人まとめて犯してあげなさい！」

「やめろっ、くぅぅ……やめろぉぉぉぉっ……！」

私と舞華に、バイオ兵が群がった。バイオ兵は私たちの衣装に手をかけると、勢いよく引き裂いていく。

ビリビリビリ……！　魔法による防御を失った魔法少女の衣装は、バイオ兵の手で、いとも簡単に千切れてしまった。衣装のありとあらゆる部分に亀裂が生じ、肌が露出していく。

「ぐっ、触るなっ……このおぉぉっ……これ以上、破く、なぁ……！」

胸元やスカートも大きく引き裂かれ、乳袋や下着が露出した。

舞華は放心状態になっているのか、バイオ兵に衣装を破かれるままになっている。

「やめろ……舞華から、離れろぉ……！」

全身の衣装がボロボロになった私たちは、仰向けで床に転がされた。体の向きが互い違いの状態で、横並びになっている。私の顔のすぐ横に、舞華の顔があった。

そして、近づいてきたバイオ兵が私たちの両脚を掴み、熟れた肉壺目掛けて腰のペニスを突き出した。

「ぅっ、あぁあぁぁあぁぁぁぁっ!!」

「い、やぁぁ、ひうぅぅぅっ……！」

私と舞華の悲鳴が重なる。

ぱんっ！　ぱんっ！　ぱんっ！

じゅちゅっ！　じゅちゅっ！　じゅっちゅ！

「ぁがっ、んっ、ぐぁあぁぁっ……んっ、んんっ！　んんっ!!」

「ぅぅぅっ……ぁっ、ぁうっ、んっ、くぁっ、ぁ……ぁあぁぁぁっ……！」

至近距離で行われる２つの抽送。腰を打つ音、いやらしい水音、そして喘ぎ声が、それぞれ２つずつ、倉庫内に響き渡っていた。

（舞華が横にいるのに、声が、抑えられない……でも、舞華の声も、いやらしくて、私と同じよ

うに、感じている……私が感じていることも、舞華に、知られてしまっている……！）

舞華の放つ甘美な声に耳を打たれ、私の性感が増幅されていく。舞華の前で無様な姿は見せなくないのに、バイオ兵の責めによって淫らな喘ぎ声を漏らしてしまっていた。

「んぁっ！　がっ！　んんんっ!!　だめっ、こんな……ぁっ！　あああぁぁぁっ!!　ぐうぅぅっ……んっ！　んぁっ！　あああぁぁっ!!」

「はっ、はぅっ、んっ、きゅぁぅっ……！　もう、私、耐えられ、ませんっ……ぁっ、ぁあぁぁっ、んっ、んんんんっ！」

２人とも、限界が近かった。

舞華の前で絶頂する姿を晒したくない。なんとか快感を抑え込もうとしたが、感度が跳ね上がった今の身体では、とても無理だった。

想い空しく、私たちは魔力を放出させた。

「ぁっ！　んっ！　イくっ！　イくぅぅうぅぅぅぅぅっ!!」

「だめっ……ぁ、ぁ、ぁぁ……イっちゃいますうぅぅっ……!!」

気持ちいい。舞華が横にいることで、２人分の快感に包まれているような錯覚に陥っていた。

「くっ、ぁっ……はぁ、っ、くぅぅぅ……舞華、ごめんなさい……」

舞華を救いたいのに、それは叶わない。無力な自分が悔しくて、私は一筋の涙をこぼした。

「アルフェリカ、さん……こちらこそ、ごめんなさい……役に、立てなくて……」

隣にいる舞華と視線が合う。顔中が粘液や唾液にまみれ、熱にうなされたようにぼおっとした表情を浮かべていながらも、こちらの身を案じている。

それにより、私の胸が言いようのない苦しみで締め付けられた。

（舞華、お前だけは、助けてやりたいのに……ごめんなさい、本当に、ごめんなさい……）

バイオ兵が交代し、別のペニスが私たちに突き立てられた。

「んぁあぁぁっ！　また……んぁあああぁぁぁっ!!」

「くぁっ、ぁっ……はぐっ、んっ、きゅうぅぅっ……！」

ずぶじゅっ！　ずぶじゅっ！　ずぶじゅっ！

抽送が再開される。しかし今回はそれだけではなかった。私たちを犯しているバイオ兵とは別の個体が、私と舞華の胴体に跨り、股間のペニスを胸の谷間に挿し込んだのだ。

「なっ、何を……どけっ、離れ――っぷぅ、んっ！　ぐむぅうぅぅっ!!」

バイオ兵は私の胸を両手で鷲掴みにしながら、ペニスを突き出して、その先端を私の口の中に押し込んだ。バイオ兵が腰を振ると、ペニスが胸の間を行き来して、口の中を激しく蹂躙する。

「んむぐぅぅぅっ！　むくっ、んっ！　ぴゅぐぅぅっ!!」

（こんなもの、口に、入れるなぁ……！　胸を、揉むなぁ……！）

私は手を動かして、バイオ兵を押しのけようとした。しかし、また別のバイオ兵が私の頭上に回り込み、腕を掴んで床に押し付けてしまう。

「んぐむっ！　んんんっ！　ぷじゅっ！　ぐっ、んむうぅぅっ!!」

３体がかりで、私を辱めるバイオ兵。抵抗を封じられた状態で、口、胸、そして膣内を同時に

責められ、快感だけがどんどん膨れ上がっていく。

私の横でも、舞華が３体のバイオ兵によって犯されていた。

「くっ、れじゅっ、むっ、くみゅぅぅっ……んっ！　んむぐっ！　んむぅぅっ!!」

舞華の大きな胸の間を、バイオ兵のペニスが滑らかに滑っている。舞華の肌に塗り込まれていた触手の粘液が、ペニスの動きを円滑にしてしまい、ペニスの中ほどまで口の中に突き入れられていた。

（このおっ……バイオ兵に口で奉仕など……こんな、屈辱っ……！）

私は目の前のバイオ兵を睨みつける。しかし、無表情なバイオ兵は意に介さず、ただ黙々と胸を弄びながら腰を振っていた。

「ぐむっ、んっ、くぎゅっ、むぐぅぅっ！　んっ！　んんっ！　んぐうぅっ!!」

「れむっ、じゅぐるっ……むっ、ぐむっ、じゅぶぅぅ……んぐるじゅっ……！」

激しい抽送が続き、２人の身体が大きく揺さぶられる。溢れる快感が脳を溶かし、やがて、弾

ける。

「んぎゅうぅぅぅぅぅぅぅっ!!」

「んっ、みぎゅうぅぅぅぅぅぅっ……!!」

２人のうめき声が倉庫内に木霊した。

びくん、びくん！　３体のバイオ兵に抑えられた身体がびくびくと痙攣する。目の前が真っ白になり、意識が一瞬途切れる。

「むぃぐっ……ぐむっ……ぐっ、りゅれぅぅ……」

「じゅぐ、ぅぃむっ……れぅ、ちゅ、ぐみゅぅぅ……」

膣内に挿入していたバイオ兵が交代する。ぐったりした私たちに容赦なくペニスが挿入される。

「きゅむうぅぅぅぅっ!!」

「んっ、りゅじゅぅぅぅ……！」

私たちを取り囲むバイオ兵の群れが、今か今かと順番を待っていた。



じゅぶっ！　じゅぶっ！　じゅぶっ！

バイオ兵のペニスが膣内を蹂躙し続ける。

「んぐぅぅ……んっ！　ぐ……ぎゅぐむっ……んっ！　んぐぅぅ……んむぅぅ！」

「れっ、じゅるぐぅ……むっ、んぐ、ぐみゅぅ、んんっ、んっ、むぐぅぅ……！」

ずちゅっ！　ずちゅっ！　ずちゅっ！

バイオ兵のペニスが口内を蹂躙し続ける。

「ぷるぐっ！　ひむっ、んっ！　んんんっ！　ぐっ、ぐむっ、ぐぐぅぅっ！」

「んっ、れっ、ぷみゅっ……んっ、じゅるぅ……んれぅ、んっ、むむぅぅ……」

じゅぐっ！　じゅぐっ！　じゅぐっ！

バイオ兵のペニスにより、絶頂へと押し上げられる。

「んっ……ぐっ、むうぅぅぅぅぅっ!!」

「ん――むぐ……んっ――んんんんんっ!!」

魔力がバイオ兵に吸収される。

私たちの体内には、まだ魔力が残っていた。

魔力が残っている限り、バイオ兵は私たちを犯すのをやめない。

「むぐっ、んっ、んむぅぅっ……ぐっ、んぐ、っ……」

「じゅぐっ、むっ、れぅ……むぷぐっ……りゅうじゅっ……」

「んぶぐ、んっ……んんっ……ぐむむぅ……」

「ひゅぐぅ……むじゅっ……れぅ……」

「……ぐりゅぅ……んっ……」
「んっ……む、ふむぅ……」
「……　――　……　――」
「――　じゅぐっ……　――」

私たちの声は掠れ、廃倉庫内にペニスと膣壁が擦れる水音だけがいつまでも響き続けた。

17

先に魔力が尽きたのは、舞華の方だった。

「……？」

隣で押し倒されている舞華の姿が光に包まれ、魔法少女の衣装が消失する。光が消えると、髪の色が元に戻り、屋敷での普段着になった舞華の姿がそこにあった。

「舞、華……！」

「ぁぁ……変身が……」

それはすなわち、舞華の魔力が尽きたことを意味していた。時間が経てば魔力が回復する舞華だが、今は完全に魔力を失った状態になっている。

「ノーブル・ローズの魔力は底をついたようね」

「あはっ！　ローズちゃん、もう魔力なくなっちゃったんだね！」

レスターが、トコトコと駆け寄ってきて、

「じゃあ、私がローズちゃんを連れて帰るね！　早く苗床に入れた方がいいでしょ？」

「今苗床に入れても、魔力は奪えないのだけれど……あなた、早く帰りたいだけでしょ？」

「うん！　ここにいるのも飽きちゃった！」

「……正直すぎて清々しいわね。それじゃあ、ノーブル・ローズのことは任せるわ」

ルカンダの許可を得たレスターは、腕の触手を伸ばすと、舞華の身体に巻き付けて持ち上げる。

「くっ……舞華を、放せ……！」

「だーめ！　アルフェリカは、そこでまだ犯されてなさい！」

「やめろ……私はどうなっても構わないから、舞華だけは……」

絶頂の連続で虚ろな表情を浮かべる舞華の視線が、私を捉える。

「アルフェリカさん……」

「舞華……！」

目が合ったのは一瞬だった。レスターが舞華を持ち上げたまま跳躍し、私が明けた天井の穴から廃倉庫の外へ出ていく。

「ぁぁ……舞華……」

その姿は、すぐに見えなくなった。

「では、私も戻っていよう。魔力を回収したバイオ兵ども、ついてくるがいい」

そう言って、グリーヴァも立ち去っていく。じゅるじゅると床を滑るようにして倉庫の出入口へ向かうグリーヴァに、ぞろぞろとバイオ兵たちが続いた。私たちを犯して魔力を得たバイオ兵だろう。

倉庫内に残ったバイオ兵は、約半分。いまだ、私を取り囲み、犯す順番を待っている。

「レスターもグリーヴァも、面倒なことは私に押し付けるんだから……さあ、お前たち、さっさとアルフェリカの魔力も最後まで奪ってしまいなさい！」

「うっ……ぁ……ぁぐ……っ……！」

バイオ兵の抽送が再開される。胸を揉みながら腰を振っていたバイオ兵が、私の口の中にペニスを再度押し込んだ。

「ぐむっ……んっ……ぐぶぅぅ……」

（舞華……ごめんなさい……本当に、ごめんなさい……）

舞華を救えなかった悔しさで、私は大量の涙をこぼした。あの無垢な少女が、触手に犯され、バイオ兵に輪姦されただけというだけでも、胸が裂けるほど悲しいのに、さらに敵の基地で辱められ続けると思うと、気が狂いそうだった。

だが、無力な私には、どうすることもできない。たかがバイオ兵に押さえつけられ、一方的に魔力を奪われるだけの存在に堕ちているのだから。

「んっ、んんっ……っ、きゅぅぅぅ……んんっ!!」

心が悲しみに包まれていても、快感は容赦なく襲ってくる。バイオ兵に膣奥を抉るように突かれ、私は絶頂を迎えた。

何度目の絶頂なのか、見当もつかない。

「ん……ぐ……んんんっ……！」

じゅっちゅ！　じゅっちゅ！　じゅっちゅ！

次のバイオ兵が腰を振り始めた。

私の魔力も、間もなく尽きようとしていた。

１８

「……んっ……ん――んんんっ!!」

絶頂に伴い、失われる魔力。それが、私に残った最後の魔力だった。

（変身が、解ける……）

私の身体が光に包まれ、ボロボロだった魔法少女の衣装が溶けるようにして消えていく。

衣装の代わりに現れた、舞華とおそろいのブラウスとスカートに、身体に付着していたスライ

ムが染み込んでいく。

「……むじゅっ……ぅ……んんっ……」

「魔力を全部吸い尽くしたようね。バイオ兵たち、もういいわよ！」

私を押さえつけていた３体のバイオ兵が離れていく。私を拘束する者はいなくなったが、絶頂に次ぐ絶頂で体力をすべて失っている私は、起き上がるどころか腕一本動かすことができない。

「大量の魔力をありがとう、アルフェリカ。あなたのおかげで、もっと強い怪人を作ることができそうよ」

「……ぅぅ……舞華を、返せ……」

「まだそんなことを言っているの？　あの子は死ぬまで私たちに魔力を提供してもらうから、返せないわよ」

「やめ、ろ……彼女を、解放しろ……」

「まったくもう。それより自分の心配をしたらどうなの？　魔力を生み出せないあなたは、この

時点でもう用済みなの。ここで始末してあげようかしら？」

「……くっ！」

悪と戦うと決めた時から、自分の命など惜しくはない。だが、私がここで倒れたら、誰が舞華やこの世界を救うのだろうか。

（ここで、死ぬ、わけにはいかない……！）

私は最後の力を振り絞って立ち上がろうとしたが、頭を数センチ持ち上げたけで、すぐに床に沈んでしまった。こんな有様では、奇跡が起きて立ち上がれたとしても、周囲を取り囲むバイオ兵の群れから逃げることなどできはしない。

「でも、そうねえ。あなた、結構美人らしいから、あいつらの遊び道具としては価値があるかもしれないわね」

「……？」

（あいつら……？）

「私の部下の人間達よ。力は弱いけど、結構便利な連中なの。欲望に素直なのがいいところよね」

（エビルズアークに味方する、人間……？）

私がこの世界に来た直後、多くの人間に襲われた。その中にも、ルカンダの部下がいたのだろうか。

「ちょっと待ってね、呼んでみるから」

そう言ってルカンダは頭に指を当て、考えるようなポーズをとった。通信系の魔法で意志を伝達しているようだ。

「すぐ来るみたい。よかったわね、ここで殺されなくて。もっとも、彼らの玩具になるくらいなら、ここで死んだ方がマシかもしれないけど。ふふふ」

ルカンダは薄気味の悪い笑い声をあげた。

（舞華……）

私はそんなルカンダに反応する気力がなく、ただぐったりと床に身を預けていた。そしていつ

しか、気を失ってしまった。

１９

「おら、起きろよ、魔法少女……いや、元、魔法少女か？」

頬を叩かれる不快な感触で、私は目を覚ました。

（ここは……どこだ？　私は、どうなった……？）

薄暗い室内。鉄格子で区切られた狭い空間に、私はいた。

（まるで、廊の中だな……）

私は室内の中央に置かれたベッドの上に、仰向けで寝かされていた。そして、わらわらと大勢の男たちが、ベッドを取り囲んでいる。

「おっ、起きたか。眠っている奴を犯しても面白くないからな」

顔に黒い眼鏡をかけている男が、私の顎を掴むと、至近距離から顔を覗き込んでいた。

「くっ、触る、なっ……！」

その手を弾き飛ばそうとしたが、私の体は動かなかった。

私の手首足首にはベルトが巻き付けられており、そのベルトからベッドの四隅に向かって鎖が伸びている。

「このおっ……！　外せっ、くうぅぅぅっ……！」

私は四肢に力を込めたが、鎖は頑丈で、引き千切れそうになかった。変身しておらず、さらにはバイオ兵たちに犯され続けて消耗している今の状態では、鎖とベッドの支柱がぶつかる金属音を奏でることしかできない。

（こいつらが、ルカンダの言っていた、人間の部下なのか……？）

私はせめてもの抵抗として、目の前の男を睨みつける。

「ほう。散々犯されたと聞いたけど、まだそんな反抗的な目ができるんだな。気に入ったぜ」

「私を、どうするつもりだ……？」

「決まってるだろ、なあ？」

黒眼鏡の男が他の男たちに問いかけると、乾いた笑い声が返ってくる。

「俺たちの性処理道具として、ここで飼われるんだよ」

「……なっ……そんな、ばかなこと……！」

こんな男たちに、辱められたくなどなかった。しかし、体が自由に動かないこの状況では、抵抗することができない。

「お前が従順な性奴隷になるまで、どれくらいかかるかな？」

「誰が……性奴隷などに、なるものかっ……！」

「いいねえ。その威勢の良さをなるべく長続きさせて、俺たちを楽しませろよ。よおし、それじゃあ始めるぞ」

黒眼鏡の男は、手に目隠しを持っていた。それを私の目に当て、視界を塞ぐ。

「や、やめろ……外せ……」

「へへへ。たっぷり可愛がってやるぜ」

男たちがにじり寄ってくる気配を感じる。

（私は、この男たちの慰み者になるのか……？）

「いやだ……こんなこと、いやだっ……！」

「さあ、パーティの始まりだ！」

「いやあぁぁあぁぁあぁぁぁぁっ!!」

男たちの手が、一斉に私に触れ、勢いよく衣服を引き裂いた。

（つづく）

あとがき

この度は本作品をご購入いただき、誠にありがとうございます。

「魔法少女アルフェリカ」シリーズ。本作はその２話目です。

ノーブル・ローズこと早乙女舞華が本格的に登場し、物語は大きく動きます。２人の魔法少女が協力することで、エビルズアークを壊滅に追い込める、はずだったのですが、敵の策略によって魔法を封じられ、敗北してしまいました。

敗北後はいつもの展開です。魔力を全て奪われるまで続く凌辱。スライム姦、触手姦、雑魚による輪姦……私の好物ばかり詰め込まれたシチュエーションとなっております。

徐々に心を通わせていた２人の少女ですが、今作のラストで無残にも引き離されてしまいました。２人の魔法少女がこれからどうなるのか、また、今回登場しなかったもう１人の魔法少女はどう物語に関わってくるのか、気になるところですね。

「魔法少女アルフェリカ」シリーズが全４話構成なのは変わっていません。３話については既に内容は固まっているので、後は一気に書き上げたいと思います。３話は触手率高めです。お楽しみに！

最後に謝辞を。今回も挿絵イラストを有魚様に描いていただきました。性感を無理やり高められ、感じすぎている様子が、表情に色濃く表れていて、眺めているとどんどん股間が熱くなってしまいます。毎回素敵なイラストを用意していただき、感謝の念に堪えません。重ねてお礼申し上げます。

それでは、また何かの作品が皆様の目に留まることを願って、あとがきとさせていただきます。

2020/6/6　端音　乱希

奥付

発　　行：2020/6/6
小　　説：端音　乱希（https://ci-en.dlsite.com/creator/4576）
挿　　絵：有魚　　（https://twitter.com/_ariu0）
　　（https://www.pixiv.net/member.php?id=6289657）
製　　作：No Future
連　絡　先：nofuture.hr@gmail.com

この物語はフィクションです。実際の人物、団体、事件とは一切関係ありません。
本作品は成人向け作品です。１８歳未満の方の購入・閲覧を禁止します。
本作品の全部あるいは一部を転載・配信・送信する行為を禁じます。